友人に送つてゐる。それからが彼の黄金時代とはなつた。一八三八年に彼は「考へ」を公々した。翌年彼は「ムツイエリ」を表はした然し彼が流刑後の首都の華やかな生活は長くつゞかなかつた。と云ふのは、その翌々年彼は一人の外國の貴族に決闘を申し込まれたのである。その原因は、その當時露西亞の宮中へ、大使として派遣されてゐたフランスの歴史家で、ブランテと云ふ男爵の子を、ある貴族の舞踐會で、諷刺を混へて皮肉に罵例したからその人が怒つて決闘を申し込んだと云ふのであるが、その決闘には相方とも命はとりとめることが出來た。フランス人の銃丸はレルモントフに命中しなかつたし、レルモントフは銃口を空に向けて放つたからであると傳へられてゐる。この事件が皇帝（ニコライ第一世）の耳に入つて、レルモントフは皇帝の怒りを買ひ、引揚げたかと思ふコウカシャへまた追ひやられて了つた。レルモントフが鋭い皮肉な人間であることは、前にも一寸云つたやうに思ふが、彼もそれを意識してゐた。そして、それがために、モスクワの學校を追はれたり、ブウシュキン哀悼詩で災を蒙つたりして碌な目に逢はないものだが、餘程その邊には氣を使つてゐたらしかつたのである。レルモントフの天才を認めた世間は、同時に彼の恐ろしい、犬儒的皮肉を呪つてゐたことも明かであつた。

二度目に流刑された場所はコウカシャのピヤチゴルスクの營舎であつた。軍人の流刑所はその頃大抵兵營と限られてゐたからであらう。この第二回目の流刑中に彼は「現代の英雄」を作つた。そして、ほんの少かの賜暇を得て、彼の絶へて間なき失策を案じわずらつてゐる祖母の許へ會ひに行つてまた直ぐ、コウカシャへ引き返したが、その時には、もう彼の生命もつきやうとしてゐたのだと云はねばならない。そして、たゞ懐しさのあまりに態々遠い山國から首都のペテルスブルグまで祖母に會ひに行つたことも、運命の暗示であつたかも知れないほど偶然に彼は同僚の手で斃されて了つたのである。レルモントフはコウカシャの風光にこそ魂を奪はれてはゐたが、ピヤチゴルスクに住んでゐる無智な人々と一緒に生活することは、ひどい苦痛だつた。その苦痛を慰むる天然の中に、たつた一人のゲオルギー州産の娘があつて、彼はその娘を愛して居たが、この娘には、レルモントフ以外にも一人の追從者を持つて居た、つまりレルモントフは戀の競爭者を控へ乍ら、せつせと、この娘の母親の家へ毎夜のごとく通つたものである。そこである夜この二人の競爭者が娘の家で落ち合つた結果として、そこに鞘當がましいことがあつて、どゝのつまり、レルモントフは、此の同僚――マルチノフ大佐と云つた――に例の物凄い皮肉をあびせた。惡意があつて云つたわけではない、たゞ、ほんの意地の惡い坐興位の心持ちで、相手を揶揄したものらしかつたが、マルチノフ大佐は意外にも恐ろしく腹を立て、決闘を申し込んだ。彼は快く承諾した。腹の中では、もう自分の死期を覺悟してゐたものゝやうに、彼は自分が怒らせた相手に銃口を向けまいと考へ乍ら、約束の日である一八四一年の七月十五日に、約束の場所であつたピヤチゴルスクの物靜かな山蔭に出掛けて行つた。

そこで彼は、マルチノフ大佐に射殺されたのである。彼の生涯は少かに二十七年で、かうした戯曲的な結末を告げて了つた。こゝまで來た私は大體に於て、レルモントフの一生を説明したつもりである。これから、私は、彼の作品に就て、私の考へを話したいと思ふがあまり長くなるから、兎も角く、一先づ此の邊で打ち切つて置いて、改めて筆を執らうと思ふ。

レルモントフの話をする場合に多少でも同じ系統の同じ色彩の詩人で、彼よりも更に有名であつたプウシユキンに就て述べなければならぬのであるが、何しろさうすると、長くなつて困るから、只レルモントフ個人のことだけにして置いたのである。

詩人ミハイル・ユリエヴイッチ・レルモントフの性格や思想は、彼の生涯に關する記錄の片斷や、彼の作物である「ある妙な男」や、「二人の兄弟」や「惡魔」などを通じて知ることが出來る。「ある妙な男」のアルベニンや、「二人の兄弟」のラジンや「惡魔」の中の惡魔（サタン）や、乃至は、「現代の英雄」（吾時代の英雄）等のペチョリンも、彼自身をモデルにした主人公又は主要人物であるからだ。彼の詩は或は彼の物語は、作者である彼が抱いて居つた理想と現實と接衝から發する苦悶悲痛がその作の主導的な動機となつてゐるとは云ふまでもないことである。其の詩や物語りを通じて見たレルモントフは、偉大な自尊家であり、厭世家であり、超人的の人間であつた。それと同時に、露西亞人として珍らしい悲哀の持ち主であつた。彼の詩は悲哀に充ちてゐた。實にレルモントフの詩に流れてゐる空氣は濃厚な悲哀である。その悲哀の芽はレルモントフが少年時代の悲慘な、寄り邊なき境遇に育てられた厭世的性格の發露であるが、この早熟な大人びた厭世的思想は、彼が成人後に於て、或る力强い暗黑な靈魂に接觸する事によつて後天的に得た病であると云ふことも出來る。私が今云つたレルモントフの悲哀は、それまでに露西亞の思想家や文學者や詩人が抱いて居つた——云ひ替ゆれば、露西亞人が一般に持つてゐた悲哀とは丸で違つてゐた。と云ふのは、先づレルモントフの初期の作物を讀めば直く解るが、大體それは、ヂユコフスキーやバラチンスキーやプーシユキンの青年時代又は初期時代に現はれた詩の中のセンチメンタルに流れてゐる悲哀とは色彩を異にしてゐることが發見されるので、バラチンスキーやプーシユキンの悲哀は、例へば永遠の青春とか、永遠の貞節とか、一年中が春であればいゝがと云ふやうな、未來に於ける人力以外の種々な無理を願ふところに生ずる悲哀であつた。

然しレルモントフの望みはかうした不合理な無窮のものではなくて、一つとして地に基かぬものはないのであつた。メレジコフスキーに云はすれば、前者等が未來を望んで、その未來を信ずるものだとすれば、レルモントフは過去を信ずる者であつた。前者等が未來の永遠を欲する時、レルモントフは過去の永遠を欲してゐたのだと人々は過去の存在を忘れて、過去の世界を銘々心から消し落して、未來の永遠を説くものであるが、レルモントフはそれと全然反對であつた。この點に於て彼は基督教

の教義と趣地を異にしてゐた。レルモントフは未來を信じなかつた。その反對に過去に經驗した物は悉く之を信じだ。そう云ふ思想は從來の露西亞人には殆んど無いといつても差しつかへないことである。從つてレルモントフの永遠と云ふものは、露西亞人共通の永遠ではなくて、彼自身の永遠であつたわけである。レルモントフは、空莫とした希望と慰安の所有主である未來に慰められるよりも、寧ろ過ぎ去つた悲痛な年月や時代の脅威を恐ろしきまでに深く感じた。彼は少年時代から「あゝ。あゝ、俺は只忘れることの出來ないものを忘れることが出來ればいゝのだが！」と口癖のやうに云つた。彼はかうして過去に於て自分を苦しめたさまざまの出來事を記憶し、その記憶の苦痛を記憶して、非常に矛盾ある悲哀を覺えたのである。「過去を忘れることが出來れば俺の心はどんなにか穩やかだろう」と呟く一方に於て、彼は、「過去を忘れるつて？馬鹿な、神樣は俺にそれを許して下さらないから仕方がない。」云ふやうな、自棄と絶望の歡樂を自ら味つてゐたのであつた。彼は過去を追ふてゐるのだとしか思れなかつた位、苦痛の過去に拘泥してゐたのである「現代の英雄」（吾時代の英雄）の中のペチョリンの口か借りて、「俺は何でも忘れて了ふことが出來ないのだ！」と云はせてゐる。また「天使」の中に彼はかう詠つてゐる。

彼（天使）は靈魂を抱いて、
涙と悲しい闘ひのこの世へ、
言葉こそないが、彼の唄聲は、
その靈魂か忘れぬやうに、深く沈んだ。

——天使第三節——

レルモントフが「未來」を重んじ、「未來」に賴り、「未來」に縋ることを敢てしなかつたのは、「未來」の必要を感じなかつたからである。厭世と云ふ語句が此處に於て頗る穩當を缺くことになるけれども、他に適當の言葉を持ち合せぬから、暫くこれで我慢して貰ふとするが、その厭世（寧ろ厭人であるかも知れない）家であり、苦痛享樂者であり、悲哀讃美者であり、皮肉屋であつた。（その當時の社會に云はすれば、レルモントフは「虚僞の人」であつた。）は、又一面に於ては、子供の心の持ち主であり、子供の微笑の所有者であつた。メレージコーフスキーが彼を論して云つた文句の中にかう云ふ意味の事があつたことを私は記憶する。それは我々が小兒の譫言を聞くとき、その言の內容が我々の周圍に密接な關係があるに抱はらず、何のことだか解釋に苦しむが、それはその小兒が「過去の永遠」を去ること餘り遠くないからだ。レルモントフの心も過去の永遠を去ることあまり遠くないから、世人に誤解されるのだと。それは別の話であるが、レモントフが小兒の心を持つてゐたと云ふ一つの證言として私は一寸擧げたわけなので、この小兒の心、過去の密接してゐる心が彼をして死を考へさせなかつた。死と云ふものを恐れしめかなかつたであらうと思ふ。彼は已の實驗以外に信ずる

世界を持たなかつた。そして彼は死と云ふものゝ存在をも否定してゐたと云はねばならぬほど、死の恐布に無頓着であつた。小兒のやうな運命論者と何物をも恐れないと云ふ心とは、レルモントフをして、二度の決闘に於て、決して相手に銃口を向けさせなかつた。

それほど過去に合體してゐた彼の悲哀が、華やかな、朦朧とした涙の霧の中にあるやうな空想的なものでなくて、すべて地上のものであつたと云ふことには何の不思議もあり得ないであらう。ブーシユキンなどゝその「悲哀」の出發點を異にする點は、それもあるし又、レルモントフが絶へず英雄的の行動に皷舞され、その英雄的と云ふことによつて、生れるロマンチックな感情に燃やされてゐたと云ふ點もある。自己に對して英雄的であるのと、他人に對して英雄的であるとの二つあるとすれば、レルモントフは前者に屬してゐた。彼がそうした浪漫的な感情を享けたのは、何よりも先づバイロンに負ふ所があつたと思はれる。

前回にもお話をしたが、レルモントフは、ゲーテやシエレーやシルレルやその他の詩を貪り讀んだ。その中で彼はバイロンを最も愛讀し、飜譯までしたのである。そのバイロンの一面である英雄的感情の消極面に深く動かされてゐた。そのヒロイックであることによつて、自然傾いて行かねば成らぬ彼は、當然の自尊家であつた。從つてレルモントフの物語りや詩の中に現れる主人公は、レルモントフのやうな英雄であり、レルモントフ自身のロマンチックな感情と意志とを繰り返してゐる立派な自尊家が多い。英雄は苦痛を蔑視するかどうだか知らないが、レルモントフは少なくともさうであつた。彼は、自分の心の苦痛に對して第三者の同情を求むることが自分を蔑視することだと決めた。彼は彼自身の苦痛を蔑視（この蔑視は享樂的の輕蔑で、敬遠の反對の意味だと承知して貰ひたい）してゐるのだから、他人の苦痛は自分に取つては何でもないのだと彼は云つた。露西亞人に云はすれば、この點に於てもレルモントフはバイロンの非人情非人間的な方面にだけ共通してゐる。そして人間的なバイロン主義——即ち積極的のバイロン主義者ではなかつたのだと云ふであろう。私は、コトリヤレウスキーの批評を思ひ出したから此處で紹介する。

レルモントフはバイロニズムを奉ずる英雄の形體こそ立派に享け繼いだが、その英雄の性格はレルモントフ自身のものであつた。彼は常に彼自身をモデルとして居つたから、バイロンの感化は只一面に限られてゐた。然しバイロンの積極的な態度は更に熟したる經驗の立場から見れば、レルモントフに取つても、通曉に易いものには相違ないが、人間と活力ある興味との密接なる親和に關すると、レルモントフにはそれが容易に出來ない仕事であつた。レルモントフの境遇は物質的にも請神的にもあまりに孤立しすぎてゐた。彼自身の形體（態度のこと）が僞りであると云ふ自覺は、彼の過去現在未來のみならず記憶と希望との上に同樣の呪ひを投ずる歴世の第一歩へ彼を導いたのであつた。」然し乍ら、バイロンの只一面の感化が、人生の問題を解決する上に貢献するところが少なかつたとは云つても、例

へば、レルモントフが軍人生活中及び、護衛兵學校生徒時代に於て、彼が、酒色に耽溺することから辛ふじて彼を救ひ出して、宗教的にも道德的にも墮落せずに、彼を詩作へ導いて行つたものは、バイロンの哲學であると云はねばなるまい。自重と自由を高唱したバイロンが、右のやうな精神的苦難時代にレルモントフを詩作の使命に忠實ならしめたのは既に認められてゐる確かな事實であつた。そのバイロンに導かれた彼が、自尊家であつたことは勿論當り前の話であるが、露西亞人はそれを嫌ふ國民であつた。ドストイエフスキーは云つた。「謙遜せよ。忽從せよ。退けよ。誇る者」を、その通りに謙遜とか、忍從とか、差し控へると云ふことに就ては、露西亞人は昔から諄々と敎へられて來てゐる。露西亞と云ふ大自然が敎へてゐる人間が自尊であり傲慢であり出過ぎであれば、その人は飢え死んだり凍死せねばならない國であつた。また露西亞人と云ふ長い歷史が敎へてゐる。自尊傲慢出過ぎ者は由來必ず「退かされた」記錄の多い國である。毎日毎日の流刑や、毎日毎日の處刑によつて彼等は實物に就て脅やかされ敎へられて來た。そして自尊や傲慢は惡德の一つに敎へられるやうな時代であつた。露西亞文學は謙遜と不自由と忍從を敎ゆる說敎であつた。そして遇々反逆的に事を試みた文學者や詩人は忽ちにして、「退けられた」。或は流刑に處せられ、或る者は處刑され或る者は殺された。プーシュキンがそれであり。ゴーゴリがそれであり、ドストイエフスキーがそれであつた。惡に對する唯一の武器は抵抗をせぬことだと敎へたトルストイもその仲間の一人であつた、が最後まで自尊自重で押したレルモントフはロシヤ文學者中の奇人と云つても差支へないのであつた。彼は自分が不謙遜であることに少の後悔もしなかつたのである。だからレルモントフは自己の力を信じてゐた。彼自身の心の苦痛が餘り鋭く深かつたので、彼は周圍の苦痛を冷かに眺めてゐた。たとへ彼のために盡された犧牲があるとしても、理想の高臺から彼は其を評價することが可なり酷であつた。周圍の感情思想が彼よりも、より深くなければ彼は賞讃しなかつたものである。それは彼の代表作「惡魔」を見ても解ることである。猶この若い熱烈な英雄的理想家、經驗の隧道を潛つてゐた冷かな尊大家を厭世的に作り上げた消極的の靈魂は、レルモントフの「悲哀」を、彼が幾多の戀物語りを取扱ふ時に於て露骨に現してゐる。

前にも一寸云つたやうに彼は經驗自尊家であつた。彼は自分をモデルとした幾多の戀の勝利を描いた。然しその勝利者は一人も幸福な終局を見ない者ばかりであつた。それは彼自身の不幸その者であつた。レルモントフは戀愛を人生の最も偉大な心の轉換者であり、最も偉大なる慰安者であると信じて、戀を涉つた經驗を持つてゐた。しかし結局はいつも斯云ふ考へが、彼の冷やかな心の犧牲になる苦痛と矛盾に終らなければ濟まないのであつた。彼は戀愛に成功したが、心の滿足は得られなかつた。彼の無慈悲な解剖的な頭腦は、彼が戀愛に向つて動いて行く感情の道を塞いだ。其時彼の戀人は彼の目に、驚くべく醜くゝ變つて映つたのであつた。だから、彼は生涯を通して、心の滿足をを得るに足

るだけの女性を發見することが出來なかつたのである。そしては、絶へず麗しき女の幻を空想してゐたが、その女は迚も地上に求め得られぬ性質のものであつた。異性を求め乍ら、一方に於てその異性に對する冷やかな非人情的の態度は、彼が最初天使として讃美した女性を八方から分析的に觀察したのであつた。そこに生ずる理想と現實との齟齬は直ぐその女性を棄てさせた。戀愛に於てすらさうであつた。宗教、未來と云ふことに大部分を置いた當時の宗教（純ギリシャ）に向つては云ふまでもないことであろう。それは彼が次に云つたやうな言葉を見ても解る。「この地上の外にに世界は無いのだ。そこには只宇宙があるばかりで、その宇宙は總ての感情を消極して了ふのだ。我々はその宇宙に消へて行くのだ。我々は二度と再び出逢ふことはない。そこには天國も地獄もない。我々は軒場を持たない野ざらしの動物だ。創造の大海に浮いてゐる難破船の破片だ。」その彼の悲哀は未來を信ずることの出來ない以外に、理想と現實の行き違いから生じて來るとしか思はれぬ過去の追憶に屬するものである。凡てが地上のものである。その地上の萬象に對する彼の神經はまた恐ろしきまでに鋭かつた。例へば山蔭に碎かれてゐる岩石に強い恐怖を感じた。斬り倒されてゐる樹木が火中に投ぜられる時の苦惱を感じた。雲と雲との私語を聞いた。彼は暗夜に戸外に出て、落ちかゝる電光を手づかみにして、一種の悲壯の快感を覺えた。その恐怖や苦惱や快感は凡て彼の心の內部の苦悶よりも更に偉大であつた。彼は初めて自分よりも偉大な深刻な感情の所有者を發見して、戀に陷ちた。メレヂコフスキーの批評も略そうであつたと記憶する。そのメレジコフスキーの言葉を引用すれば「藝術家は一般に同樣のものが地上に存在してゐないから、自分達の創作を美しいものだとしてゐるが、レルモントフはそれと全然反對に、同樣のものが常に地上に存在してゐるから、その點で自分の創作が美しく見ゆるのだと云ふのである」と。それは、レルモントフが掴み取つた自然の深刻な感情であつた苦だ。レルモントフの地上に對する愛は、一般的に云へば、頻る「非地上的」なものであつた。それは彼がロマンチシストである所以であつたと云ふのである。メレジコフスキーは、彼の詩に表はれた戀愛即悲哀は、世界のどの詩にも發見することが出來ないと云つたが、つまり此處のことだと思ふ、評者は又言ふ。「若し死人が死後に於て猶引き續き地上を愛するならば、かう云ふ風に愛せねばならぬであろう。」と。

こゝに於て、レルモントフの思想が反基督教的であると云ふことが解る。基督教は、所謂地上から天國へ——此處から彼處への宗教であるに引き換へて、レルモントフの宗教は天國から地上へ（彼に天國はなかつたが）彼方から此方へ行くものであつた。「レルモントフは非人間が人間の殼を被つたものゝやうに見える。人間世界を閃き過ぐる流星のやうな、異境からやつて來た動物のやうにも見える。お互に變つた姿をしてゐる物だと、お互に見遁すことのない人間世界だつたから、彼は自分の姿を隱さうと努めた。その結果の極度の沈默は、彼をして世間から、尊大だと見做された。人々はかく

して彼を面と向つて見るに堪へないのであつた。彼の存在によつて受くる不安な壓迫より遁れるために、屢々部屋を立ち去つたのであつた。或る者は彼を見ると、恰もレイデン瓶に接觸する時のやうな物理的の衝動を感じたのであつた。人々は此現象を彼の內部にある「僞」に歸した。レルモントフは、常に人々に對して不眞實であるとした。

「彼は人々より一段の目上に立つてゐやうと努めてゐるのだ。」と考へた。然し實際には、勿論彼はそんな積極的な皮肉な態度があつたわけではないばかりか、それは何れの批評家も同樣の同情を示してゐることであるが、レルモントフは世間の人々から、かう云ふ風に別物扱ひにされることを恐れてゐたのであつた。內心悲哀を感じてゐたのであつた。

彼は自分が周圍の人々とは全然異つた感情の持ち主であると云ふ秘密を隱し乍ら、周圍の人々と同じ人間に見られやうと努めたのであつた。そしてそれが不可能だと悟つた時彼は、その悲哀と失望とを癒す目的で、怪しい耽醇の巷へ出沒した。或時或事で、一人の少女に慘酷な態度を取つたこともあつた。こうした不身持ちが周圍の人々に知れた時、彼はあらゆる罵倒を受けたり辱められたりした。その時であつた。彼は不斷自分よりももつと人間的な高尙な、神の理想に適つた人々ぞと考へてゐた周圍に向つて、始めて彼等の正體を發見したやうにかう叫んだのである。「ああ！俺はやつと〳〵今彼等に打ち勝つた！彼等は今こそ俺を彼の仲間の一人だつたと云ふことを信じてくれるだらう！」實際彼は一時的にかうした人の野卑の溫かさに、氷のやうな過去の永遠の苦痛と恐怖とを忘れた。かうした周圍の人々は彼を一種の惡魔に見たのである。それは惡魔であつたかも知れないが、「カラマーゾフ」やゴーゴリの所謂惡魔とは全然で性格の異つた惡魔であらねばならぬ。彼の代表作「惡魔」と云ふ長詩を讀めば、その惡魔はどんな惡魔であるかと云ふことが解る。レルモントフの惡魔に、つきものゝ冷笑も嘲刺も虛僞も吐かない惡魔であつた。子供のやうな純な心を持つた惡魔であつた。所詮露西亞人の空想にある恐ろしい怪物ではないのであつた。彼は美しい惡魔であつた。それはドストイエフスキーやゴーゴリやのやうに作者が拵へた、惡魔ではなくて、レルモントフが苦しみのあまりに產み落した惡魔であつた。メレジコフスキーは彼を所謂惡魔とは見てゐなかつた。彼の言葉を借りて云へば、昔々、神とサタンとが戰つた時に、その兩者のいづれに味方してよいか解らなくて感つてゐた樂園の天使等の態度を決めさせるために神は、此等の天使を地上へ、（特に有限世界の地上へ）追ひやつて、そこで暫くの生活を營ませたと云ふ話がある。その通りにレルモントフの靈魂も過去に於ける其天使等の靈の一つであつた。それがために彼の「二性」は神に對して絕へざる重荷であつた。プーシシュキンの外に我々はレルモントフと彼の地上に於ける使命とを持ち合せてゐることを記憶せねばならぬ。何故なれば、最後にサタンは神と和睦するだらうから、そしてその時、この兩者を結びつくる働きを勤めるものは何かと云へばそれは、愛であるからと。

ソロビヨーフは云つた「マルチノフは神の劍であつた。彼は血に飢えた惡魔の欲望を懲すためにつかわされた者であつた。」とマルチノフと云ふのは、レルモントフを最後に決鬪で倒した大佐の名である。露西亞人は云ふ。「謙遜せよ。謙遜でなければお了ひには退かせらる」と。それは私の愛する詩人レルモントフに云はなければならぬことであつた。ゴリキーは「老婆イゼルギル」の老婆イゼルギルに物語らせて云つた「神樣はかうして、誇る者を罰しなすつたのです」と、それは超人ララのことであつた。

以上私は知る限りに於てレルモントフの人物を紹介した積りでなる。彼の代表作「惡魔」の飜譯を試みたいと思つてゐる。

惡魔

第一章

第一節

樂園を追はれた惡魔が
悲しげに罪深き世界へ飛び下つた
天國にありし日の幻影は
生々と群がつて彼をめぐつた。
その幸ありし月日の記憶は、
無辜の天使等の中にある時の、
火天の王國に輝いた。
青空に彗星のうかぶとき
悅びの言葉や、
また彼と寵愛の微笑をかはすことを望んだ。
永遠の智識に渴いて、
彼が注意深く霧をくぐつて踉つけるとき、
彷へる遊星の商隊は
無限の裏へ投げこまれる、其時彼は聽くのだ
創造の幸ある最初の出生を！
「忠實」と「愛」の聲には
疑惑も憎惡もない事を知つた、

またそこには佗しく無駄の年月の脅嚇の
夕暗の中に彼を待つこともなかつた——
此「惡魔」が知るところの多くは……
然し昔の記憶に彼は苦しめられたのだ。
長い長い間彼は無賴漢として彷つた
荒凉の空間を、絶へまもなく
無數の世紀は速やかに過ぎ去つた
恰も一瞬のやうに、押し合ひへし合ひ乍ら
また同じやうに——近づくくかと思へば過ぎ行くのであつた。
餘りに貧しく弱々しい此「地上」を統べるに
惡魔の技術は無比であつた
だがそれにも直ぐ魅力と快樂を失つて
この世は單なる焦聊とこそはなり了つた

第二節

コーカシヤ連峯を越へて、

樂園の亡命者は飛び去つた
金剛石片のやうに、永遠の雪と氷に輝く
カスベック峯の麓へ、
蛇の住む罅隙ある洞窟のやうに黑く、
見下せろば、深くも絡まり合つた
ダリアール斷崖の陷坑は走つてゐた。
そこを下つて獅子の吼ゆるやうに
テレーク川は躍つてゐた
騷げる鬣に泡立て乍ら。
この山獸も舞ふ鷲も
青空の下に輪を描いて、
波の呼號に答へて啼いた。

註（波の呼び聲と云ふのは、聖書の中の一句である）

黃金の雲は日毎北を指して、
速やかにも路を急ぎつゝ翔んでゐた。

遠い遠い南の國々を歴遊したのちに。
神秘にも寂かに瞑想ふかく
群がる陰暗の巖石はそば近に
雪に鎖された頭を傾げ乍ら、
一心に飛び散る波を見守つてゐた、
斷壁の上の城の塔は、
霧の中から暗い威嚇の顔を顰めてゐた——そしに統治する巨人等
コーカシヤは其門道をこゝにかゝげる！
彼の周圍の世界こそは粗野にも壯嚴だ

註（彼とはコーカシヤのこと）

だが、高々とした幽靈は
輕蔑の眼を、
この「神」の創造の上に落した、
そして、彼が見るものゝ一つをも
彼の面に出さうとしなかつた。

今一つ生ける美の景色を、
彼は、己れの足もと遙かに擴がれるを見るのだ
豐かな光彩に織られたる一枚の絨氈こそはグルージャの地の贅れる谷々である。
盛福の輝ける「地上」の一角よ！
石柱立てる古の廢墟の祟かなる中に立てばあまたの咳く小川は脈々さうに流れてゐる斑色の小石
を洗ひ乍ら、
その間に見ゆる薔薇の樹々に集る小鳥は
戀歌を唄ひ、常春藤は纏る
その莖に、密葉からなるチナーラ樹の寺院を蔽ひ、
その外に
臆病者の紅鹿の群は
蒸暑い夕暮に山檐の贈物を探してゐる、
閃めく生と私語く木の葉と
百階の聲音のはづみと、
千種を負へる空々の重い暑さと、

華麗な夜の愛ふかき露と、
そして星の群――處女の眼のやうに澄んだグルージャの娘の視線のやうに光る星の群と！
だが、ゆらゆる「自然」のこんな光輝は
この「惡魔」の靈魂の中には起らないのであつた、
一瞬間の悅樂こそあれ、そこに優しい心はないのであつた
彼はどんな刺戟をも感じないし、また何の呼び聲も聞えなかつた
彼の眼に映るすべてのものを、
彼は强いて憎むか、さもなければ蔑んだのである。

第三節

庭園を前にした嚴そかな家、
それはゲダーリ祖代々の灰色の住居だ、
數多き涙と苦痛は、
惱ましく働いた哀れな農奴の事を語つてゐる。
朝まだきから長い長い影が、
隣山の傾斜へかけて這ふて行く。

側檐から導かれるところの、
ある足の步びは荒々しく石に打ち切られ、
アラーグヴの水晶泉へ急ぐため。
若いタマーラ姫は日毎に、
彼女の白い顏布をなびかせ乍ら路を下へと、
下つては水汲みに行く、
美しいアラーグヴ川の靑色の水槽から。

第四節

その古城は巖頭に止つたやうにして、
遙かに眼下の谷間を陰鬱に見下ろしてゐるしかし、ヴルナバイヴや葡萄酒は溢れる――彼が開ける祝ひの今日一日を、
老人ゲダールはタマラ姫に祝言（しゅくげん）を與へた
彼等の身寄りの者は其處に集つた
配けられたる祭りの席に招かれて。
幅廣き屋根は絨氈で敷き詰められた。

彼女の友達に混つてタマラは、
終日踊つたり唄つたりして過すのであつた。
遠方の山の蔭に、太陽は
黄金の海をつくつて半ば沈んだ。
輪をつくつた處女たちは据り乍ら、
唄ひ聲につれて折々手を拍つた。
タマラは彼女のタレブリンを提つて、
頭上神速に打ち振り乍ら身を飜へして、
小鳥よりも輕々と爪はぢくかと思へば又
忽ちに彼女の舞踊をつゞけて、
彼女の閃めく好まな一瞥を投げる
妬み深かさうな瞼毛の下から、
彼女の眉毛は羞むやうな形に曲つてゐた、
彼女のしなやかな姿は速やかに傾き。
絨壇の上に辷るやうに閃めいて行く

彼女の小さい清い形の足は。

*　*　*　*　*

それは彼女が最後の踊りであつたらう。
明日の朝彼女は異なる世界に入るだらう。
婚禮は束縛の運命を伴つて來るだらう
グダールの唯一のあとつぎ娘に、自由の寵兒に、
彼女は家を去つて住まねばならなかつた。
そこに見ず知らずの血族と出會つて――服從することだらう。
彼女の顏には朧ろげな顫ひが現はれた。
疑惑の影も、
しかし、彼女の動作が、あまりにはつきりと、
あまりに嚴かに、單純に、愛み深くあつたので、
丁度「惡魔」が飛んで來て、
彼女の前に現はれ、ふと彼女を見詰め乍ら彼が以前の同族を思ひ出しては
踵をかへして立ち去りつゝ嘆息を洩らすやうに見えたのである……

第五節

「惡魔」は彼女を見守つた……
突然に彼は有頂天と悲哀に襲はれた
彼の靈魂の沈默せる沙漠は
忽ち喜悅の調子で鳴り出した
今一度「愛」と「善」と「美」の
聖い廣大は、彼の靈魂の底に輝いた、
すべての陰暗は消え去つた。
彼は暫く凝乎として賞嘆するのだ。
昔の夢の鎖りをたぐり寄せる幸多い、幻形を
また「天」の記憶をも
それ等は新々として眩しい流れの中に溢れわたる。
一つ考ゆれば、それは一の星のやうに光り閃めく
或る神秘力に鎖がれたやうに
彼は不思儀にも成る悲哀を新らしく感ずるのであつた

恰も感情の大夕立のやうに
彼が覺えのある言葉に使つて鳴り渡つた。
それは改新のしるしであつたらうか?
恐ろしい誘惑の言葉は消え去つた
彼れの心は最早詐りの底から遁れてゐた。
彼れは自分の過去を忘れるだらうか?
然し「神」はこの救ひを決して與へまい
また彼も、「物を忘れることを」受けとるまい

* * * * * *

氣短かの花聟は大急ぎで、
彼の馬を疲らせた、
彼は實際祝言の時刻を一刻でも無駄にすることが出來なかつた。
アラーグヴの岸に首尾よくついて、
駱駝の列の後につづいた。
優美な、注意深い足どりで、

美しい祝言の引出物を携へ乍ら。
駱駝の小さいベルは夕暮のもやに、
甘く低くリン〳〵とこそは鳴つてゐた。

* * * * *

彼の馬は、稀に見る黄金色の
白く泡立つたもので、耳をそば立てゝは
ながし目に側を見たり噴鼻したり、
洞の深淵に躍る波を恐れてゐた。
路は危險であつた——
川の流れと岩石に挾まれて狹かつた。
時刻は次第に遲くなつて、
紅色の明りは頂きの氷と雪を離れ
場所は霧に立ちこめられて來た。
この隊商は足を早めた。

第六節

路傍に、此處に、寺院の堂がある。
ある王子が地獄の憎惡を受けて殺されて以來、
往古より平和の底に休めるところ、
今は、一聖人が、跪づき乍ら、
「神」の面前に祈禱するところである。
旅のさすらひ人が此路へさしかゝる時はいつも
祭禮に行くにも戰ひに行くにも彼は祈るのである、
祈禱の僧靈墓の前に跪づき乍ら、
そうすれば屹度あらたのしるしがある、
モスレムの劒よにもなれば、その外の危難よけにも。
だが、此の花聟はつと通り過ぎた不注意にも。
規約と誓ひを等閑りにして、
彼は自分の道を急いだのであつた。
こゝに「惡魔」は秘かな空想に耽つてゐた、
愛人は唇を、タマラに接する夢を

見乍ら、荒々しく二人の馬丁を
山の孔道から追ひ立てたが、
だん〳〵そこへ近づくにつれて……
一發の銃聲が起つた！足下に何があつたか？
と云へばその王子が言葉もなく馬鞭を振ひ乍ら
響を立てつゝ馬鐙の上に立つてゐた……
燧發銃の口は閃めいて、
彼は鷲のやうに突進した。
爭鬪の中へ、指揮するために。
今一丸——苦悶の叫びと、
谷間にこだまするほどの呻き聲とがあつた……
空虛の次にすべての物は靜寂に環つた。
溫頃しいグルージャ人は呼び集むるに難いほど散りになつてゐた。

* * * * *

祝宴は混雜のかぎりを盡した。

娘達は位いた。城庭は人だかりした。
その馬は何人のものであつたか？
刺車に血まみれ鞭あとにかく危うくのがれて
門前に打ち倒れて死んだのは。
冷めたく啞のやうになつた乘り手は誰か？
爭鬪のあとはあり〳〵と
暗黑くたくましい彼の容貌に現はれてゐるが、
彼の衣は血糊で赤々と濡れてゐる
彼の兩手は感動深くむすぼれてゐる
馬の鬣を最後に引掴んだまゝに……
タマーラの目は、彼女の愛人の上に
いつまでも止まつてゐなかつた！
彼女の王子は約束を守つて、たとへ殺されても
祝言の祭りにやつて來たのだ。
あゝ！彼の生命は永遠に去つて了つた

彼は二度と再び彼の馬へ跨らないのだ！……

第七節

あたかも「神」の電に
祝言ごとは打たれたやうによろめき崩れた
タマーラ姫は、彼の女の床に倒れたまゝ
棄てられたやうな季獨の憫れな心地で啜り泣くのである。
苦悶の涙のあとからまた涙が飛ぶやうにつづいた
彼女が充たすことの出來ぬ悲嘆にまで
ところが忽ち彼女は泣き止んだ、
彼女は魔術のやうに優しい聲を聞きつけた、
『無駄の憂苦に泣き沈むことを止めよ、子どもよ
數前の涙をとゞめよ、
涙はお前の處女の頰の色を燒くのだ、そして、お前は醜く見ゆるだらう、涙は死人を甦らすこと
が出來ない。——
涙は魔術の露ではない筈だ。

お前の愛は遠く隔つて彼は聞く譯に行かない、
彼はお前の樣子を知らないし知ることも出來ない、
「天」の、光こそ今や、
彼が肉なき目の不滅の視力を愛してゐるのだ。
彼は聖頌を聞いてゐる、
この世の愚かな夢や眺めが、何になるだらう、
また寂かに繰り返す處女の欲獻が
「樂園」の客に取つて何になるだらう？
果然、人間の運命と云ふのは、
私を信ぜよ、地上の天使よ、
お前の子供らしい悲しみには、
一瞬にも値せぬものだ！
無限の青々とした太洋の中に、
そこには舵も帆もなく、
しつかりと、おとなしく、浮いてゐるのが、

霧の路にある星の唱歌隊だ。
「天」の無窮の野を横切つて、
空間に樂々と搖れうごく
捉え難い羊毛のやうな雲の群は
のろ〳〵と過ぎ去つて跡をとゞめないのだ、
會ふときも別れるときも、
彼等に取つては悅びでもなければ悲みでもない
未來の時日はどんな希望をも生まないし、
彼等に取つては、過去も悔ゐの種となることがないのだ。
この厭な悲嘆のときに、見よ
彼等を、お前の目前の必要に、
地上の心痛のときに、彼等のやうに冷かなれ——
彼等は決して後ろを振り返ることがない。
「夜」が絹の覆を投げ下ろすや否や、
コーカシヤにも他のすべての世界の上にも、

寂に妖精の如くなりつのつて、
「自然」の魔術の呪棍と呪文に魅化される、
西風が微々と羞かしさうに搖れると直ぐに、
萎んだ草には
そこから啼く鳥が悅ばしく飛び立つ、
葡萄樹と玉蜀黍の蔭には又忽ちに、
夜の花が露を見出して、
救はれたやうに花瓣をひらいて首を擡げる、
後ろの山々から、黃金の彎月が辷り登つて、
こつそりとお前の姿を偸見る時直ぐに——私は毎夜、お前の、側へ飛び降りて、來やう、
そしてお前の處女の睡りを靜かに夜明け迄守つてやらう
そして又お前の睫毛の上に、私はふわり浮飄き乍ら
灰爐の夢を妙に求めさせやう……

第八節

彼の言葉は聞えなくなると

暗い空氣の中へ溶け去つた。
タマーラは跳び上りさま、
周圍を見廻した。彼女の一處に留つた凝視は、
恐怖よりも感激よりも衝動よりもつと強く輝いた。
動搖の中に沸るやうに、かくて、
彼女の感情は悉く焰につゝまれて了つた。
前に結ぼれた彼女の靈魂は悲しんでゐた、
血管の中には火があふれてゐたが……
猶件の聲は餘りに優しく新らたにも勇敢に、聞えてゐるやうに思はれた、それから朝まで、
希へる睡りは、
彼女の疲れた睫毛を癒しに下つて來た。
だが、その時でさへ、それは彼女の心を動かした、
奇怪にも豫言的の幻影で、
沈默の捉え難い、
人間の形の美しき不思議の來訪者は、

彼女の怜悧な物思ひの種とはなつた、
彼の愛らしい目や彼の慕はしい顏は、
悲哀に包まれ乍らも、彼女に理解と、
同情と友達のやうな優しさを、持つてゐた。
それは「天」に住む客ではなくて、
彼女の守護天使が空低く舞ひ降つて來てゐたのだ、
その身の周圍には後光がなかつた。
彼の捲髮は虹の尾光の香氣を含んでゐた。
またその顏は苦痛に悶ゆる惡靈の
その惡魔の定罪のそれの如くにも見えなかつた。
彼は丁度清透な夏の夕暮のやうで、
晝でも夜でもなく、また太陽のやうに明るくも、陰鬱でもなかつた

第二章

第一節

『タマーラ』

「お父さん、脅かさないで下さい！後生ですから！
あなたの娘を辱めないで下さい、ね、妾
『これが最初でないんですもの――――あの
妾を奪りに遠くから口説きに來る人達がグルージャの果からやつて來て、
慌てた無駄骨を折るんですけど……妾は
何卒信じて下さい、誰の妻にもなりやしないことよ、
あのグルージャの美しい眞珠の中には喜んで應ずる娘がいくらもゐますわ！』と云つてよね父さん何卒嘲笑ふことだけ廢して頂戴！
妾が毎日少しづゝ衰へて行くのがあなたに解るでせう。
妾は怕ろし毒の夢に憑かれてゐるのです、
ある惡魔のやうな靈魂は
妾を苦しめる力を持つて、それが何だか……あゝ妾は死にかけてゐるわ！憫んで下さい！妾を謗
遜な尼寺の聖い支配の下に置いて下さい、
そこで妾は救世主の守護を享けるでせう

救世主は妾の悲しみと獻欷とを見守つて下さるでせう
妾は救世主のお側へ行くのを屹度吃驚したり怕れたりするでせう
一生の樂しみはすつかり納められるでせう
聖塔の杠の下へ
その薄暗い穴ぐらが妾の住家になつて
早過ぎる妾の住家になつて
早過ぎる妾の墓、それは永遠の墳墓なのです

第二節

彼女の願ひを容るゝために悲しめる血族達はタマーラを連れて行つたのである
一つの淋しい平和な尼寺へ
謙讓な髮布は彼女の姿の魅力を被ひ隱した
だが、その下には昔さながらの、
絹花緞に包まれてゐる
ある不法の幻影が、
彼女の心を侵して顫ひに波立たせた。

祭壇の前の祈りの最なかに
禮拜時の肅聖に輝く小蠟燭のなかに
彼女はその怕れる聲を聞きつけるのだのだが
それは飽くまで聞き覺えのある聲で
寺の影深いアーチの下に
時々、沈默な――明瞭した妖怪が彷ふのだ、
以前のやうな呪符をとなへ乍ら
そしてその焚香の淺藍色の霧の底に
妖怪は星のやうに和やかに閃めき乍ら
やがて未知の世界へ誘ひ込まれて行くのであつた

* * *

尼寺の遠方近方はいづれも
沈默の中に山谿がひろがつてゐた。
淡むらさきに染められた山脈は
空をくぎつて、くつきりと、美しくも又不思議なことには、

その山谿の夕ぐれの
黃金や眞紅のヴェイルに變つて行く景色であつた。
その中にもカズベック山やその他の高嶺の
雲の上までも頭をもたげて居る
その頭帕や皇帝が着るやうな花絨が
全部氷と黃金で刺繍されてゐることだ！

* * *

然し罪深き思ひに充たされた
不幸な尼僧のタマークの心には、
無上の歡樂は入つて來なかつた
彼女の目に映る世界は影にて汚され
「自然」は苦悶のたねに過ぎなかつた。
曉のはじめの光や眞校中の時刻にも
彼女は床の上に打ち伏して
聖畫像の前に獻祭する姿を見せるのであつた。

そして夜の靜けさの底に
かく惱める靈魂の悲痛は
過行く人を煩はし呟かせた、
「こんなに慟哭するのは、洞穴に鎖がれた山の精かしら?」
その人の耳は鋭く、力は失せて、
疲れ果てた馬に拍車して門前を過ぎ去つたが。

*　*　*　*

夕靄は白いヴェールを投げ下ろした
グルージヤの丘や谷へ
彼の慣はしに忠實に例の惡魔は
尼寺の聖き棚のうちを探し廻つた。
しかし、彼は神聖の恐怖にかられて
敢て戸口を押しあけて大膽に、
この聖堂を汚さうとはしなかつた。
するとその瞬間彼は己れの

地獄のやうに暗い惡德を棄てやうと考へて一寸喜んだが——。
そう考へながら彼はそろ〳〵と
塔壁を下りつゝも俄かの身ぶるひに
襲はれた。
まるで耳にもつかぬやうな。
風のない夜の眠れる木の葉に近づき行く頃
でもやはり彼は扉の内に侵入することを逡つた
彼は仰ぎ見た、
そこには
タマークの部屋の窓から來るランプの閃めきがあつた
彼女は今に誰か來るのを待つてゐるやうに見えた……
すると、眠りを催す靜かな空氣をゆるがして幽かにも遠くから歌聲が傳つて來た。
チンガーラの鳥の響鳴につれて。
壓へられたやうな知らかな音は、
夕暮の流れに溢れて丁度あの、

珍らしい天使の優しさのやうに、唄は
天上に生れはぐくまれて地上のためのそれであつた
折から、一人の天使が古往に於て、友達だつた彼に
會ふために飛び下つて來た
そして、また彼等を歎ばせた過去の歡樂を歌ふために
また彼が耐え忍んだ苦痛を、慰めやうとして？
最初「惡魔」は彼が愛して居たことを知つた
その次に、どんなに彼が說き從へやうとして愛を欲したかと云ふことを。
俄かの恐怖に彼は飛び去らうと思つた……たが心を破るやうな苦痛に
今渴ける目の前にあることを考へ乍ら。
名狀の出來ないぼんやりした沈默の
期待にまつわるとこさの顫える恐れが
今や彼の誇りやかな魂を劫やかしたそれがある一つの凶兆と運命に打ちのめされた前兆のやうに
……
聖い神堂の壁の中で

彼が最初に入口で出會ふのは
天の使ひの天使
美しき罪人の守護者であつた。
彼の高々しい眉は後光で輝いてゐた。
彼の翼は固くなつて——力が拔けてゐた！　そして奇異な事にば！　彼の覆ひつの目から一滴の
涙が零れ落ちた……
この刹那に
タマーラの塔に
焰のやうな涙に燃えた一つの石が轉がつた！　非人間の涙それは、悲悔のしるしであつたか！

*　*　*　*　*

彼は望みを抱き乍ら意氣揚々と這入り込んだ
彼の魂は光明に向つて再び開き直つた、
そしてある一つの新らしい實在が
彼は彼女の優しい微笑の前に彳んで
雪白の翼をひろげ乍ら彼女をかばつてゐた。

彼の天上の光輝ある出現は、
「惡魔」の眼光を暈まして、やさしき挨拶の言葉を代ゆるべきに
叱聲こそ與へられた。
侵入者の、顏のまともからその怒りの叱聲こそは
「おい間斷なき誘惑の靈魂め
誰がお前を此處へ呼んだのだ？
この潔い場所にやつて來たつて誰がお前を敬ふものか
こゝでは勝手に惡事を働く譯に行かないのだ！
俺の至純な愛の手前にも神堂の手前にも、
お前の足跡をつけてくれるな！
一體誰がお前呼んだのだ！」
「惡魔」の顏には
誇りやかな嘲笑が浮び出た
「惡魔」の顏にはサット嫉妬と輕蔑の色が流れた
そして彼の靈魂の奧底には、

また例の以前の憎惡の毒刺が目醒めるのだつた。
「失せやがれ！　」と彼は怕ろしい刻聲で怒鳴つた、
「その娘を手離してくれ！　彼女は俺れのだ！　ね。彼女は俺れのものだ！
お前が今頃幻影を描いた處でおつつくものか後の祭りだ
俺達ばお前の尤もらしい怒りなら、返上してやる。
彼女の心には誇りが染みついてゐるのだ
俺はもう既に俺の桎梏と封印とを捺しつけたのだ、
だから此處はも早お前の神堂ではない
此處は俺の戀と福利の王國だ。」
天使は哀れみの視線を
この毒物の犧牲者の上に落した。
そしておもむろに悲しさうに空へ翔ひ上り。遂に天邊へ姿を隱して了つたのであつた。

（第　二　節）

『タマーラ』

「まあ。あなだは誰？　あなたの言葉は怖くて妾顫へるわ。

誰があなたを寄越しのたの――地獄？　樂園？

何の用なの？　ね、云つてごらん！」

『惡魔』

「あなたはほんとに美しいね」

『タマーラ』

「でもあなたは誰だつて云ふのにさ？　誰？　……お返事なさいよ！

『惡魔』

私はあの眞夜中の靜寂と休息のなかに、

あなたの耳を傾けた聲の主た

私語のやうにあなたへ近づいた考への主だ

あなたの夢に現はれた幻影の主だ

あなたがぼんやり推量して臭れた悲哀の主だ。

私の一瞥を受ける凡ての希望が凋落する日の主だ

その希望が咨みかけるや否やに――

私は誰にも愛されないものだ、

どんな生ける毒心や咀呪もその運命を痛んで私に向けられる

空間も時間も私にはゼロだ

私は自分に與へられた農奴の筈だ

私は了解と自由の太守だ

私は「自然」の敵だ

世間の絶望と「天」の悲嘆。

それに拘はらず私はあなたの足元に伏してあなたを崇拜してゐる！

私はあなたの許へ和やかな戀の祈禱を持つて來た

私の悲しみと聖い恐れとに

私は浮世の苛責を負ふてやつて來た――。

それは私がはじめて零す謙讓の涙なのだ。

おゝ可哀相だと云ふだけでもいゝからあなたの耳を貸して下さい、

なたの一言で私は愛に甦ることが出來る！

私はよろこんで

あなたの愛の聖衣を纏ふでせう、そしたら

明るい光輝に充ちた新らしい天使となるのだ。
お丶、たゞ聞いて下さるだけでいゝ。ね、何卒！
私はあなたを愛してゐる――私は今のところあなたの奴隷だ。
あなたの姿をはじめて見た時、
私の心の中には秘密の憎惡が湧いた
それは私の持つてゐる永遠性と力のために。
私は無意識のうちに嫉妬を感じたのだ
人間の貧しく淺墓な喜悅のために、
でもそれすらなければ人生はくだらないものだ
あなたから遠ざかつて生くることの何と苦痛な事か。
それは私を恐れしめるのだ！
突然の情熱が血のない心臟に漲つた
凋める古傷ふかく
再び蛇のやうな悲哀の苦痛が起き上つた。
あなたが居なければ永遠が何になるのだ？

私が孤獨だとすれば無限の王國が何になるのだ！
それは空虛な言葉と神なき神廟に過ぎない、
無用の美と、無駄の廣さの！

『タマーラ』

「あゝ、あつちへ行つて頂戴よ、この誘惑の精め！
口を利いちやいけない、妾は信じやしないから！
お前は妾の敵です……あゝ！
妾はもうお祈りが出來やしない、致命の毒が妾の弱い疑ひ深い領を引裂いて了つた……
お前は妾を危險に陷らせる人だ
お前の言葉は
親切さうに聞ゆるけれどもその眞、火と破壞です……
ね、聞かして頂戴――お前は何故妾を愛してゐるのだか？

『惡魔』

「どうしてゞす？　私は知りません。
新らしい電氣を吹き込まれた私は誇りやかに私の罪深い頭から今や刺の冠を投げ棄てた。

私は自分の悲しみを吹き飛ばして、
自分の過去を――塵にして了つた、だから、
私の樂圖も地獄もあなたの目の中にあるのだ！
私の感情は人間には解らない。
あなたは眞實の感情の泉を知つてゐない、
私のはいつまで不滅にされてゐる。
無窮の物の上に支配を垂れるのだ。
地上の世界が始まつた時から、
私の心の目には永遠にわたつて
あなたの姿像が印されて精氣に充ち渡り
その影は永刼の世界へ向つて走つたのだ。
あなたの名前は私の耳朶に鳴り響いてゐる
それが平和と瞑想を搔き亂すのだ。
樂園の光榮ある幾年は
たゞあなたが創られたことによつて打ち缺かれた！

あゝ、あなたにそれさへ解つて貰へば、
私の生存の悲痛
恐ろしい年月の間の怕ろしき堅實との、
苦痛――私は決してそんなことは考へなつかた
と云ふのは、惡業をして讃められやうとも、親切な心の振舞ひに對して報酬を受けやうとも、
忍ばねばならぬ煩悶困倦、この爭鬪の、
それは永遠につゞくのだ
平和も勝利も決してやつて來ない
後悔も又希願もない
知ることも感ずる事も見ることもない
私の意志に反して憎惡することもないが
しかしそこには私に對するより深い輕蔑がある！
それは全能の太守が
私の破門と不忠實と刑罪とを言ひ渡すや否や
「あらゆる創造」が暖かい抱擁から私を蹴跳ばして了つた。

青い廣大の空に一つ一つの星座は
花嫁のやうな光芒を輝かせてゐる
それは彼等が出來立てから私が知つてゐるのだが
今は既にぎら〳〵と燦り乍ら頭上を通り過ぎて行く
その昔の私と云ふ友達を見忘れたやうに。
あゝ！　私の運命の友達を
私は悲嘆の底から訪ねたが、
陰險な怒を帶びた顏や苛酷な言葉つきは
何と受取れないことではないか。
恐慌に打たれた私の翼は開いて私は飛び去つた！
しかし、何處へ、そして何のために？
「樂園」にゐる友達はこの流刑者の運命を
憐憫もて見守つてゐた。
丁度この友達等のやうに、この浮世は私を知らないのだ。

*　*　*　*

この人間達が支配する空間の一小部に私は時を過してゐた。
その間に私はこの人間達の靈魂へ罪を染み附けた
貴い善の叱嗔に嘲られ乍らも
私はそんなことでは痛くも感じない！
短時間、永久に、私は僞りを離れた。此昏迷の大象の、
そして私は山の裂罅や狹路に身を隱した
惡事をして喜ぶこともない寂しい流星のやうに」

*　*　*　*

だが私は屢々あの荒れ狂ふ壞滅や暴風雨の中を
眞夜中に飛び廻つたが、
心を慰むる絕へ間なき希望は仇となり
私の疼む心は叛ひ亂れて
私の心悔の苦痛を殺さうと劫やかした
その心悔の苦痛は忘れたくとも永久に永久に忘れることの出來ぬものだ！」

*　*　*　*

『タマーラ』

「何だつてお前の悲しみと嘆きを知らなければいけないのだらうか？
そのお前のはつきりした悲しい聲を？
罪人よ……　……」

『惡魔』

「私はしかしあなたに對して罪を犯しましたか？」

『タマーラ』

「あれさ、人が立ち聞きするわよ……」

『惡魔』

「いゝえ、私達は一人ぼつちだ。」

『タマーラ』

「でも神樣が聞いてゐらつしやるでせう？　」

『惡魔』

「神樣は私達の方を見やしないでせう。
神樣は空の上の事しきやお構ひなしなんだ。」

『タマーラ』

「でも地獄が？　そして刑罪と苛責が？……」

『惡魔』

「ふん、そんなものが何だ、あなたは私のものなのだ！」

『タマーラ』

「ねえ、そんな不思議なお前が、誰にしろ妾はほんとに聞きたくもない事を聞いてゐたわ。妾の
平和が永久に失はれて了つてゐる事を妾はちやんと知つてゐるわよ
でもお前は苦しさうだ
そして其お前の苦しみをもう妾はいつまでも忘れる事が出來ないでせう、
でも若しお前の言葉が僞りで狡かつたら
そして若しお前が妾を騙さうと企むなら……。
妾はどうして「天國」に行くだけにもつと値打があり得やう
それはお前が知らない人達よりも？
美しい女はいくらもゐるわ！　妾のやうに
その娘達の處女の寢床は人間の手で折り目がつけられて居ないのよ

ね、お前の誓ひをおくれ、お前の聖ひ誓いを、お前は知つてゐるでせう――妾が負けて今苦しんでおることを――

お前は女の優しい夢を見たでせう……。

でも妾には何だか今迄の恐ろしさが減つて行くやうだわ……

お前は何でも悟つて御存じだらう……

そして屹度妾の行く先は憐れみなのね！……

誓つておくれ、そして其しるしを見せておくれ

罪と惡事は只今限り棄てゝ了ひますつてことを。

でなければその誓ひは破れてゐて

約束は空虛の聲だと？……。」

『惡魔』

「いや私は創造の曉かけて誓ひませう

地上の事實の敗滅かけて誓ひませう

罪惡と惡事の羞恥かけて誓ひませう

「眞理」の勝利にかけて誓ひませう。

征服の閃めく希望の數々にかけて誓ひませう

降服の慘ましい苦痛の數々かけて

あなたと巡り合つたことにかけて

そしてあらゆる物を失ふ脅嚇にかけて。

靈魂の領土にかけても誓ひませう

私の哀苦の友にかけても、

大天使等の熱情なき劍にかけても

それは私に取つては心の硬い敵なんだが、

私は「地獄」や「天國」かけて誓ひませう

あなたによつても、又神聖によつても誓ひませう

そのあなたのたつた今の一目で私の靈魂は奴隷にされて了つた

それほど純な怒りなき唇から洩れる吐息に對しても

あなたの其絹のやうな辮髪の波うちと輝きにかけても誓ひませう苦悶や傲氣や、

あなたに對する愛、神にかけても、――

私は今、昔の力を棄てるのです

私の考へも誇りも何もかも打ち棄てるのです今後は毒ある阿諛の夕立は決して、
人間の頭を掻き亂すやうな事はありません。
私は「天國」と和睦したいのです
私は地上のあらゆる「眞理」や高尚な「正義」を祈り且つ信じ度いと思ひます！
あなたに價値ある悔ひの涙は今、瞼から消え去つて
天上の焰の一切の跡片と共に、
未來には福利ある無智の花を咲かせて、
人類の上に永遠に統治させやうではないか！
これだけは信じて下さい、と云ふのは、
私ほどにあなたを了解し尊重する者は他にないと云ふ事を
さあ此處に私の申出がある、
私は全力をあなたへ棒げた、私の神殿も！
そして私はあなたの愛を求める、私は愛の祝福が必要なのだ。
あなたは只一瞬間で永遠の世界を得るだらう。
信じて下さい如何だけ私が愛にも怒りにも公平な事に於ても偉大であるかと云ふことを

自由な氣儘な精氣の子である私は
星の群の上へあなたを連れてきませう
そして、あなたを「自然の女王」にして上げやう
私の最も高い愛、永遠の寶とは
何一つとして比べる物もないし、其を拒む者もない！……。
＊　＊　＊　＊　＊
私の僕の精魄のあるじを、
從順に私の足元へ呼びつけてやりませう、
又精氣の妖き乙女達の群は
あなたに會ひたいと思つて待つてゐるでせう。
夕暮の星が頂いてゐる冠を彼女から奪ひ去つて、
あなたのおつむりへ戴せてあげませう
夕暮の花から露を掬つて來て金剛石の代りにその冠の上に煌かせませう
私は夕日からあの眞紅を奪ひ去つて
その明るいリボンであなたに帶をさせて上げませう、

あなたの周圍の空氣へ
澄んだ夜の薫りを浸しませう。
どんなことがあつても滅びない魔術の音樂はあなたの耳をさまざに魅することでせう。
私はあなたを住ませるために宮殿を建てませう土耳古玉と眞珠と黄金で。
私はあの星達が持つてゐるすべての富を取りませう
私はこの國のどんな寶でもあなたへ上げませう——
だから私を愛して下さい……。

第三節

彼女の上にじり〳〵とにじり寄つて
彼はタマーラの顫へる唇にふれた
彼が火のやうに燃え上る唇で、そろ〳〵と。
誘惑に充ちた言葉は、
彼女の返答をねだるやうに注がれた。
彼が力强い焔のやうな凝視は彼女を燃やしてゐた。
つのり行く焔は、
びたりと接し合つて恐ろしいものであつた。
或不思議の力
その暴力を行るに殘忍な刄のやうな、
かくて惡靈は打ち勝つたのだ。
毒々しい彼の接觸は
この小兒のやうな胸に致命の打擊を與へた。
苦悶の叫びはほとばしり出た、
この時刻の沈默と休安とを破つて、
穴部屋と寺塔の中をその聲は傳り乍ら響き渡るのだ。
かく僞りなき、かく若々しき人生の花に對する絶望的な別れとその聲は。

*　*　*　*

この眞夜中の夜まわり番人が鐵鑼を叩きながら、
寺院の周圍を巡つてゐたが、
その寂かな巡廻の途上にあたつて、
叫び聲と呻き聲と、心ゆくばかりの接吻の音とが、

彼の心を惱ますやうに――彼はふと立ち停るのであつた。
罪ある疑惑の群像が彼の良心を通り過ぎた。
忘れて了つてゐたその昔の彼の記憶が、
この老番人の頭のなかに湧き上つた。
彼は氣づかはしげに穴部屋の壁をのぞいた、
しかし一切は再び平和と靜寂に返つてゐた。
たゞ、木の葉摺れとそれを裏ぎる
山の裂罅へ織り込み流れ行く
小川の私語が聞ゆるだけである。
彼の考へは慌しく消え失せて、
老番人は厭はしき雜念を打ち消すために
急いで聖い十字を切り乍ら
いつものやうに巡廻をつづけて行くのである。
大股に急ぎつゝ、深い憂悔に沈み乍ら。

* * * * *

眠れるペリのやうに穩やかにやさしくも、
タマーラは彼女の柩の底に横つてゐた。
（註）ペリと云ふのは女性の惡魔である。即ち天女が樂園を追れてからの名稱である――
旋る布よりも純に且つ白々と見えたのは、
彼の青ざめた絹のやうな瞼、それは永久に、
惱まされ煩はされないやうに閉ざし合つてゐた。
だが、いかなる人が云はないか？
「彼女の顏に日光がふれるか又は、
やさしい接吻をして再びこの世の祝福へ、
彼女を甦らせたいものだ。」と。
しかし、それは無駄なことだ。
黄金の光が彼女の瞼を過ぎつたとて、
懶い羞い或は大膽な愛情はその寵愛を植えつけてゐる、
何ものをもその冷たい封印を剝がす事は出來ないのだ、
そこは「死」の「永遠」が支配してゐるのだから！

そしてタマーラの着物はその昔、
これほど虹のやうに眩しく豐かではなかつた、
あの祝祭の夜にしろ、さうだつた、
それは山谿の花が薫りを送つたのだ。
（かく往古の法規は要求した）
そして彼等（花のこと）の生々とした色合の冠は、
彼女の最後の手に掴まれてゐるところの、
地上の光明に別れて行く、その憂苦をおくつてゐた。
彼女の沈默せる顏には、
どんな微かな、或は重々しい情熱を湧かせた終焉の影も
宿してはゐないのである、
戰慄や自棄の影は
大理石のやうな容貌から消え失せて、
冷やかな不感のこゝろが美と偉大と寂莫とを偲ばせてゐた、
想ひも感覺も呼吸もなく——そこには、

人々の「死」のやうな神秘な美しさだけがあつたのだ。

* * * * * *

彼女の血族達と親しかつた隣人達は、
喪して行列の途についてゐた。
その胸を叩き狂氣のやうに己れの髪を、
掻き搖り乍ら、疲れ果てゝだんまりしたグダールは、
再び彼の白髪の軍馬に跨るのであつた。

* * * * * *

三日三晩の旅は、或一つの岩の頂上へ導くのであつた。
そこには彼の先祖達が眠つてゐる、ところで、
ある出しやばり男の大膽な考へで、と云つて、
その男は悔の信仰深い香橙皮に浸つてゐた男で、
その男の考へで、一つの寺が建てられてゐたのであつた、
そこに虐られた民衆が「天國」に近くべき骨を埋めてゐたのである——
あたかも死の住家がより暖かであるかのやうに、

でなければ、昔の地上の悲哀から遠ざかるために。
そこだと、つまり最終の休息がより安全になるやうにと——
だが、それは無用な心づかひだ！死人なぞが、
生きてゐた時分の事を夢見るやうなことがあるものか。

* * * * *

青々として精氣の大空に、
一人の聖天使が翔つてゐた、
その翼は黄金色に彩られ
兩腕には一人の罪人を抱へ乍ら
人間の世界から「天國」へ向つて。
優しい希望の言葉で天使は
彼女の苦痛と恥辱と疑惑と恐怖とを追ひ責めた、
罪と苦痛の跡を、
天使は慰安の涙で洗ひきよめてゐた。
既に「樂園」の物音は聞えた、

底知れぬ深淵から、その時に、
惡靈が駈けのぼりさまその前を横切つたが、やがて、
シューと響を立てゝ浮き上つて來る——
彼はあらしのやうな力を持つてゐた。
そして電光のやうな光條の痕を打ち切つたり閃めかしたりしてゐた。
鐵面皮にもくやしさうに、だが、誇り高々とくり返しくり返しかう云ふのだ、
その女は俺のものだ！失せやがれ！」——
次第に祈りをひそめ乍ら、恐怖に打たれ、
守護者の胸にうなだれて涙をためつゝ打ち顫へてゐる
そのタマーラの罪業深い靈魂は戰いた。
彼女の運命を決する時が來たのだ——
「惡魔」の、征服するやうな、幻影が再び現はれた。
しかし、誰に、思ひ出す事が出來るだらう？
あの彼の昔の輝ける姿を？。
彼が怒りの凝視には復讐の色が籠つてゐた。

* * * * * *

「さあ消え失せろ、陰慘な暗黑の幽靈め！」

「天國」の使ひはかう答へた。

たとへお前が暫時の征服者であつたとて、

審判の時期が今やつて來たのだ。

「神」の裁斷は彼女の罪業をのぞいて下さるだらう。

彼女の試問と苦難の日はもう過ぎ去つたのだ。

彼女の地上に於ける「被ひ」とともに、

罪業の鎖は彼女の瞼から落ち去つた。

我々は以前から彼女の來るのを待つてゐたのだ！

彼女の靈魂と云ふのは、その持ち主に戻つた、それはまた、

人生と云ふものが長々しい慘酷な苛責であつたところの魂なのだ、

地上ではそんな靈魂は決して花を開かないのだ、

何故なら、「神」がその靈魂に良心の絲を授けられた、

その絲は最も光ある精氣の、最も美しい織機で織られたものだからだ。

その靈魂のために地上と云ふものは創られたのではない。

だから地上はその靈魂にとつて全く無意味なものだ、——

悔ゆるために彼女はそうした運命を與へられたのであつた——

疑惑と、破られた誓ひの償ひに——

彼女は愛し且つ苦しんだ、悲哀のために、

偉大なる「天國」の門は今開かれたのだ！」

* * * * * *

その時、この「誘惑の精」に向つて、

「天使」は峻嚴な視線を投げつけた、

「惡魔」の目にはこの黃金の翼の、

高々と舞ひ上つて蒼穹の中へ溶け込んで行くのが見えた。

征服した「惡魔」は彼の願ひと憧憬とを呪つた、

かつて一度そこに愛の輝きの見えた狂える夢をも。

かくて再び彼は心おしさうに立ち上つた。

嘲りを含んだ驕傲さと大膽さを見せ乍ら、たつた一人——「宇宙」のまん中に

*　*　*　*　*

一切は曠野のそれの如く――いかなる、
昔の佛もこの廢墟には見ることが出來なかつた、
世紀の手は、すべてを、
老グダールの輝ける事蹟や
やさしくも麗はしきタマーラの事の
聖い記憶をも打ち消さうとしてゐた。
その山嶺の小さい寺は、
そこにある土と石の上に彼等の骨が埋められてゐるところの――
雲の中にひとりとり殘されてゐる。
聖い力に高々と護られて、
門側には大理石の番人が立つてゐる。
見張りに就いて、雪頭の氷衣を武器として――その氷は日光に燃え輝く。
永遠の雪は、
落ち來る瀧の水が止つて凍つたやうに、
疲れ果てたやうに、口を開く裂罅の上に、
顚へ乍ら垂れ下つてゐるが雪まじりの寒風は――
そこを見守りつゝ風雨に朽ちた壁々の、
塵を吹き落してゐる。悲むかと思へば、
またそこをぐる〳〵吹き巡るのだ。
この高場所の寺の話は、
「東方」より雲を齎らすだらう、
そこへ巡禮に旅立つ者へも
そこの墓碑の上に嘆き泣く人へも。
だがそこへ來て拜む者はなかつた。
「高嶺カズベック」は近く聳え立ち、
嫉ましげに彼が「相續物」を護つてゐる。
そして「人間」の不休不止は、
彼等が安息所の靜寂を消し去る事が出來ないのだ。

（以上逐行譯）

ローマン主義全盛時代の五大文學者の中の、プーシュキンが社會的詩人の代表者であるとすれば、レルモントフが厭世的詩人であり、アクセイートルストイが純貴族的詩人であるとすればネクラーソフが「インテリゲンツィア」の代表的詩人であるやうに、所謂ヘーゲル派の流れを汲んだ哲學的批評家ビエリンスキーの「何と云ふ豐かな貴い性的を持つた男だらう！私はこの男一人に面を向き合つてゐると、幾人もの智識ある人々と伍してゐるやうな感じがする」カルツォフは、健全な、男らしい農民詩人としての代表的人物でなければなるまい。そのアレクセイワシリエウイッチ、カルツォフは露暦一八〇九年十月三日に、露西亞の東南部ウォロージュの町に生れたのである。彼の父は牧畜業者（農夫――ロシヤの農夫は牧畜を副業とすることが多いけれども、カルツォフの父は、牧畜の方が本業であつたらしい）であつた。その家庭はそれほど貧しくはなかつた、と、同樣に、あまり教育のある人々もゐなかつた。彼の父は極めて露西亞風の保守的な、嚴格な性質の老人であつて、教育などは、一通りやれば、それで澤山だと云ふやうな考へを持つてゐた。ところが、この少年カルツォフの學問に對する執着は、生憎、なか〳〵強いのである。彼は町の寺院に屬する僧侶の小學校を卒業しただけでは滿足が出來なかつた。彼は父親に乞ふて、無理にその地方の中學へ入つたが、漸く不自由のないやうな程度に讀み書きが出來たかと思ふと、彼の父はその學校を中途で止めさせて、家事の手傳ひをさせたのである。その家事の手傳ひと云ふのは、少年に取つてはそれほど苦痛なものではなかつた。仕事は、草原に放つ飼ひにしある家畜の群を、見張るのであつた。家畜賣貴と云ふやうな荒つぽい粗野な社會――小さいこせ〳〵とした五日蠅い取り引をする無趣味な囲圍氣はこの自然の友の魂にさほどの無聊を與へないばかりか、草原の生々した徽風と廣漠なる眺望とは、さうした社會から受くるすべての惡い賤しい印象を打ち消すに充分であつた。牧畜業者にしてはじめて享ける得るところの美の感覺、民謠と傳說の中に包まれた町から町へ、村から村へ、草原の上を彷ひ歩き乍ら家畜を賣つたり買つたりする農民生活――即ち彼をめぐるロシヤの大國民生活の繪畫のやうな麗はしさに魅せられた少年カルツォフの詩的本能が、自然に養はれてゐた間に彼はかう云ふやうな境涯にある百姓達が持つてゐるやうな狡猾一點張りの常識に囚はれずに濟むことが出來たのであつた。また、少年カルツォフのためには、草原の上の生活は彼に充分な讀書の時間を與へてくれたのである。彼が最初に得た文學的の智識と云ふのは、ロシヤの傳說であつた。（尤もそれは彼が幼年時代から父親に聞かされたものであり又、當時文學者の誰もが、そうした幼ない處の經驗を通つて來る例ではあつたが）その傳說は次第に彼を小說と詩へ導いて行つた。尤も此の時代の小說と云つたところで、それは、前に述べたやうな人々によつて作られた詩形を借りた物語りに過ぎなかつたことは勿論である。彼は自分で父から貰つた若干の小說を讀みつくした。彼が初めて買つて讀んだ本

Кольцóвъ, А. В. (1808-1842)〔カリツオフ〕

は、ドミトリエーフの寓話と詩であつた。で、彼の考へによると、詩と云ふものは、元來讀むばかりのものではなくて、これを唱ふべきものだと云ふのであつた。かくて、彼はドミトリエーフの詩句に一々勝手な飾をつけて唄ひ歩いた。その時分(十五歳の時)彼がはじめて作つた詩の動機と云ふのは、彼の友人の一人が、毎夜續けて同じ夢を見た。それが又頗る奇妙な夢であつた。友人はカルツオフにその話をして聞かせた。その話を彼は詩に作らうと考へたのである。勿論彼は、詩型學や修辭學の智識があるわけではないけれども、出來るだけドミトリエーフの作品に似せて、それに近い形の詩を作つたのである。その詩(「三つの幻影」)一篇が出來上るまでには凡そ一週間を要したと云ふことである。そしてその小い仕事が、意外にも、彼の生涯の方針を決めて了つた。彼が詩に於ける愛はいよ〳〵つのつて行つた。その當時、彼に文學上の感化を與へたのは彼にはその昔全く無識の人達であつた。その一人はウオロネージュ町の本屋であつたウオロネジュ町には只一軒の小さい本屋があつた。その主人ドミトリ、アントノウイッチ・カシキンと知り合つた。カシキンはカルツオフの試作の詩謠を讀んでかうした田舍に珍らしい才能を抱いてそのまゝ現はれずに了ふことを惜んだ。そして思ひきり彼を後援する積りで、詩形學の話や作詩法などを敎へた。その傍らカシキンの力の及ぶ限りに於て必要な書籍を都から自費で取り寄せてやつた。その書籍の中には、彼が崇拜措かなかつたプーシュキンやジュコーフスキーやデルヴイグの詩集があつた。殆んど碌に綴字さへ呑み込めない彼は是等の作品に

魂を打ち込んで行かうと努めるのであつた。カシキンは親切に是等の作品について、たとへ覺束ながらも、一應の批評を與へて彼を導いて行つた。カシキンは、云ひ替ふれば、詩人としてのカルツオフの最初の敎師であつた。かくするうちに、この田舍詩人の强い個性は自然に展べて行かれた。この時代のカルツオフに彼が終世忘れるこの出來ない心の感化を與へたものがあつた。それは彼の初戀であつた。彼の父親は一人の麗はしい女性の農奴を所有してゐた。女性の農奴は彼の友として彼の妹の友として家事を手傳ふために買はれた娘であつた。彼女の名はドウニヤシヤと云つた。カルツオフは十七の年に此に戀したのである。ドウニヤシヤはカルツオフを愛してゐた。そして、カルツオフの戀を受け容れた。ドウニヤシアは彼女の買ひ取られた身體の自由を得たいために、カルツオフに正式の結婚を求めたのであつたが、この秘密の情事は忽ち彼の父親に發見されて了つた。彼の父親は二人の關係にきつぱりした解決を與へるために、わざ〳〵用事を拵へてカルツオフを草原の彼方へ追ひ遣つた後で、丁度その町へ通りかゝつたカザーキの團體にドウニアシアを賣り飛ばして了つたのである。ところで、用が足りて草原の彼方から漸く家へ歸つて來たカルツオフは、片時も忘るゝことの出來ないドウニアシヤの部屋へ秘かに忍んで行つた。そして彼女の居ないことを發見した、つゞいて、父親の口から、彼女が賣られて了つたことを聞いたのである。父親の無情なそして殘酷な惡戯を知つた彼は、父親を怨むとともに、心の底から絶望して了つたのであつた。その時彼は殆んど致命的の熱病に

襲はれた。それは熱のために腦神經をいためたのであつた。後年に、彼女との、知らぬ間の別れを彼は唱つた。

仄暗い黃金色の青春の曙に
私は心の底から自分の戀人を愛した、
彼女の目には聖天の光が眩しく宿つてゐた、
彼女の頰には戀の焰が燃え閃めいてゐた。

五月の朝も、彼女に比べると何だ？
母親のやうな綠の森も、
草むくの平野の繡箔の爽々しさも、
夕ぐれも、妖艶な夜も。

彼女がおまへたちから遠ざかれば、
おまへたちは人の心の悲愁を分け合ふばかりだ、
おまへたちが何處にゐやうと、彼女さへこゝにゐれば、
彼女は春を霜降らせ、日を暗の夜と、する。

私は決して忘れまい――と彼女に言つた。
『では、さようなら、私の戀人よ！
人の世が私たちを引裂くのも神樣の御心だ、
しかし私達はいつの日にか又出會ふだらう』
すると、彼女の顏は深紅に熱して來た、
それから雪の白布をそつとのべるやうに――
心を痛める獻歡にくづをれて、
彼女は私の惱ましい胸に縋りついたのだ。

『行くなよ、待つてくれ、可愛い輝きの鷹よ！
此苦惱の打擊を鈍らせるために暫くでも』
そうして私の心は打ち沈んで行つた、
私の呼吸は喪せ、私の言葉はなくなつた。

（完）

この詩の中に「おまへたち」とあるのは勿論彼の家族全體を指して言つた言葉である。で、死に面した熱病から辛うじて遁れるこの出來たカルツォフは忘れ切れぬドウニヤシヤを探すために、彼女の後を追ふて、草原の上に毎日漂泊の旅をつゞけて行つたが、彼女の姿は二度と見ることが出來ずにしまつたのである。後年彼は批評家ビエリンスキーなどに、その時分既にドウニアシヤは、ドン河の沿岸に沿ふて屯する狡猾なカザーキのために虐待され病氣にでもかゝつてゐたことだらうと語つたと云ふことである。で、かうした悲劇はカルツォフの心をますゝ詩の方へ惹きつけて行つた。詩をよみ詩をつくることが心の苦痛を慰むるたつた一つの鎮痛劑であつたに相違ない。丁度その頃親しみ合つた二人の新らしい友人が彼の失戀をなぐさめた。その一人はセミナリヤの學生だつたセレブリアンスキーと云ふ青年詩人であつた。一人は當時モスクワの文壇に屬するスタンキエウイッチであつた。スタンキエウイッチの父親はウオロネジュの小さい町に別莊を持つてゐた。さうしたことで彼とは自然近づきなつたと思はれる。その他にもこの地方へ遊びに來たスリカエーフなどとも交際するまでに、彼の文學的修養は進んで行つた。スリカエーフはカルツォフの原稿を讀んで幾度も彼に都會へ出ることを勸めた。カルツォフがはじめて自作の詩を出版したのは確かに一八三〇年であつたと記憶する。（書名は「日記の中の數葉」と云つた）彼の喜びは非常なものであつた。しかし、彼が現在の境遇は、彼が得意になればなるほど彼に叛いて行つた。彼は、この時分から、彼が現在たづさわつてゐる放牧の仕事と將來に横つてゐる、ばかりでなく、既に目の前に迫つて來てゐる機運との間に深い深い濠があることを發見した。そして、自然この二重の恐ろしく懸け離れた生活に苦痛を感じ出した彼は、當然のこととして現在の仕事から遁れなければならなかつた。彼の父親はカルツォフの目的、趣味、才能にはまるで無頓着だつた。寧ろ、そう云ふ金にならぬ仕事は、一人前の男のする事としては實に馬鹿氣きつたまゝごとのやうに考へて、それまで、カルツォフの成長に持つてゐた興味をすつかり失つて了つたのである。彼の妹も父親と同じ意向だつた。かくしてカルツォフは段々家庭と離れて、行つて、了ひには自身と家族との間にも、一つの大きな濠が出來上つたことを發見せずにゐられなかつたのである。見棄られ、見限られたカルツォフは、しかし、別に悲しまうともしなかつた、そして、いかにこの友達もない、金もない、鍬も鋤も耕馬も土地もない貧しい一人の男はこの世の中をくゞりぬけて行つたものかしらと云ふ風に、大きな樫の卓子の前に一日坐り込んで考へることがめづらしくなかつたのである。だが、彼はやがて呟くのである。「俺に貧乏をくれたのは、たしかに俺の親爺だが、親爺は、しかし、貧乏の外にも一つ生れる時から俺にくれたものがある、それは勇氣だ！」さうだ！と彼は考へたのである。翌年彼は家事の都合でモスクワへ出た。その時彼はそれまでの勞作を携へて行つた。スタンキエウイッチの奔走で彼の詩「指環」は「文學雜誌」に掲げられた。文壇の注目

は次第にこの田舍詩人の身邊へ集つて來るやうになつた。この「指環」はその他の作品數篇――例へば「若き收獲者」とか「愛の季節」など丶共に人間の魂の奥底に湧き出て來る極めて神秘な戀の心理解剖的な試作であつた。その時分から、カルツオフのことを誰云ふとなく「農民詩人」と云ひ出した。或は「民衆詩人」と云ふやうになつた。文壇に於ける彼の地位や名聲は、彼の後を追ふて飛び出したネクラーソフやナドソンほどではなかつた。彼は、かう云ふ風に、父の用（その大低は、家畜の賣買であつた）を帶びてモスクワやペテルスブルグへ屢出掛ける機會を持つてゐたのではあつたがしかし、彼が都會の逗留は極く極く短かいものであつた。そして又都會から戻つて來るたびに、田舍の狹い狹い地方的生活が嫌になつたのである。ことに一八三五年スタンキエウイッチの骨折りで彼の著作がモスクワで出版され、その一小冊子が忽ちにして文壇的位置の確立と賞揚の的となつて以來彼は都會生活憧憬者の一人となつて田舍の事は忘れたくてならないのであつた。彼はその頃、スタンキエウイッチの紹介で文壇の中樞人物――例へば彼に哲學的思索の傾向を與へた批評家ビエリンスキヤブウシユキンやジユコウフスキーやヴイアゼムスキー太公や後年有名になつたツルゲニエーフなど丶と會ふことが出來た。（「彼はつゝましやかに足を揃へて投げ出して時々咳をし乍ら、部屋の片隅に座つてゐた。後は咳をするたびに直ぐ手で口を蔽ふた。彼は自分の身のまわりを羞かしげにもじ〳〵し乍ら見廻しては熱心に耳を傾けて聽くのであつた――」《ツルゲニエフー》――）「彼」とはカルツオフのことである。後の著作集はやがて文壇以外の一般讀書階級へも擴まつて行つた。それはこの「家畜賣買業者」の心の叫びが當時のロシヤ文人には未だ嘗て試みられないところの自由と目新らしさとがあつたばかりでなく、後が用ゐた詩の形式こそは、從來の國民詩謠とか持情詩とか史謠（それに就て私は「口傳文學」の項に於て一通り說いた）などがダニロフやリブニコフやヒルフエルヂングなどによつて發見されて、トレヂヤコーフスキーやスマロコフなどによつて作詩作曲の上に大いに用ゐられ改造され、メレッキーやメルッニコフやデルヴイグなどによつて新らしい生命こそは吹きこまれて來たものに相違ないが、しかし、只、異國情緒的に導かれてロシヤの衣を着たものに過ぎないので、猶且つカルッオフ以前にもかうした農民文學者はあつたが、それ等は殆んど、申し合せたやうに、都會人（ネクラソフのやうに）の見た農民の生活記錄で、カルッオフのものから見れば力の微弱なものであつたし、カルッオフの作品に流れてゐるやうな純な農民の魂の河は認むることが出來なかつたのである、で、そうした前驅的の作品に缺けてゐた純然たる寫實による地方色――カルッオフの地方色は主として南方に限られてゐたやうだ――の生々した美しさと、農民の心を支配する歡樂と悲哀と、力と、農民の若い男性や女性の心の奥底にうごめく苦惱と情熱とを、いさゝかの所謂「技巧」や「センチメンタリズム」に陷らずして描出してゐるからであつた筈だ。文壇の先覺者達は彼の作品を推賞した。カルッオフに取つては、かうした先輩達と往復することによつて、從來その人達について抱いて

ゐた崇拜心、憧憬、敬慕は一層強くなつた。彼等の言葉は一言片句にしろ彼を鼓舞する力があつた。そしてこの新らしい智識と學問とを設へて國民性に順じた「寫眞主義」の宣傳に努めてゐた先輩たちの人格、思想の波は、次第に彼の心を浸して、かくて、無意識の中に、彼もまたその大波の一波となつてロシヤ文學黎明期の一大潮流を形造つてゐたのであつた。かくて、一八三七年に皇后がウオロネジュの町へ遊んだときに彼女に隨伴してゐたジュコフスキーは、カルツオフを訪ねた。カルツオフは皇后に引見の光榮を擔つたと云ふことで、町の民衆の熱狂と誇りの中にカルツオフは狂せんばかりの名譽を感じと云ふ話がある。さうした先例のたんとないロシヤの地方のことであるから彼等の歡喜は勿論私たちの想像の外にあつたことであらうと思ふ。この名譽がカルツオフをしてロシヤの一般社會に偉大なる倒影を投げ下ろした動機の最も大きな一つであらねばなるまい。正直なカルツオフはかう云ふ大きな背景に囚はれ過ぎた。可哀さうに、彼はその誇りを單に誇りとして誇り過ぎたのである。とでも、云はねばならぬことがあると私は思ふのである。それはその後土地の人々との間に一つの離を拵へて了つた。その時も彼の家族は土地の人々の味方をした。結果、彼は父親から疎遠され、彼の家族の中で彼を一番愛してゐた妹からも口を利かれなくなつて了つた。その時分から彼は肺を犯されてゐるのが確實なことゝなつて發見された。その肺患は又次のやうなことで一層重くなつて來た、と云ふのは、彼が二度の戀である。戀の對象は美しい教養のある、しかし不幸なことには、心の冷たい地方の娘であつた。彼女はカルツオフを愛してゐなかつた。（それは後で知れたことであるが）で、彼女は無造作にカルツオフへ近づいた時の調子でまた無造作に彼を離れて了つた。そして、その土地の青年士官と駈け落ちしたのである。彼は謠つて云ふ。

お前は別の路へ一人で行つて了つた、
それはお前の歡樂と賤しい娯みのためだ
それはお前の疲れた情慾と戀の閃めきのためだ、
かくてお前は他の男達を選んで行つたのだ。
だが其路はいつまでもつゝくだらうか？
お前の魂に殘される物に何の價値があるだらうか？
お前の選んだ愛人が
ほんとうにお前に心を捧げて眞實にしてゐたか、
自分を犧牲にして
お前の魂を救はうとしたらうか？
その男は今どこにゐるのか？さあ、

俺に會はしてくれ、
腕をひろげてお前もろともに
人生を手を携へて歩くために祝福してやらうではないか。

だが、違つてゐるよ！お前は棄てられて、
たつた一人なんだ、
ひとりぼつち——崖の上に、
狂氣のやうに悲しみ、魂を打たれて、
仇に救ひ求めてゐるが、それは無駄なことだ、
かくてお前はだん〳〵絶望に傾き乍ら
お前の禍ひと最後に近づいて行くのだ。
さあお前の手をおくれ、そこにはいつも、
破滅へ行くまでのお前を救ひ出す時間があるものだ。
まあお前の手は何てえ冷たくて顫へてゐるんだらう！
お前と一緒に歩いてゐると俺は恥かしくてならないのだ、

嘲けられたり、群衆に叱られたりするから
だが、俺はしつかりしてゐる、俺は、
お前の側に身を捧げて止まつてゐるよ、
そして俺はも一度お前を救ひ出して導いてやる
有毒な罪の坑から。
そこでお前はも一度こゝに來て、
祝福された幸福と歡喜の中に入つて
俺の大空の上に再び輝くのだ——
俺と俺の路の上の星のやうに。

（以上逐行譯）

その後彼はピエリンスキーに招かれてペテルスブルグのピエリンスキーの家に度々滞在することがあつたけれども、父親の商賣はいつも彼を呼び戻した。で、最後にペテルスブルグに出掛けたのは、一八四〇年であつた。彼は、ペテルスブルグに永住したかつたのであるが境遇はいつもそれに反對した最後の歸郷の折には彼の病氣はひどく惡くなつてゐた。彼ははじめて病氣から受くる貧困の若痛を

痛切に感じたのである。家人は殆んど彼を構ひつけなくなつて了つた。彼の父も既に老境に入つてゐた。商賣は段々複雜になり、面白からずなつてゐた。カルツォフは病みほゝけ乍ら父親の仕事の手傳ひをしてゐたが、この老人と病人の働きは從來の仕事の半分をも切り捲くることが出來なかつた。農夫として何の力もなくなつてゐる彼は終に家人に棄てられて了つた。彼は床に就いた。暗い部屋の片隅の寢臺の上に横り乍ら、彼は迚も實現出來ない夢を描いて生きやうと繰搔くのである。生れつき、他の幾多の詩人たちが持つてゐるやうな、朦朧とした夢想的の性質や夢幻的の憂愁を知らない彼、生々とした心の力の持ち主であり、或る點はなか〳〵數理的な頭の所有者であつたカルツォフは、その到底再び立てない場合にあつて、さて、ペテルスブルグへ行つた後の樂しい自由な生活を夢に見るのであつた。當時にあつては、どんな偉大な勢力を持つてゐる文人でも、その人に恒産がない以上は、その本來の事業に沒頭する一方に於ては、どんなに汚ない、いやな、みすぼらしい生活方便の仕事でもやつてゐなければ生活に困つたものであり、さう云ふ習慣であつたので、病床にあるカルツォフも、都へ出てから先どうして食べて行かうか、どうして衣食の料を得る職業を探さうかなどゝ考へ煩つてゐた。だが、それに對する――いや、一切の事に對する解答は當然やつて來べくして到頭やつて來た。カルツォフにして見れば全く意外であつたかも知れないのだ。彼は恐ろしい吐血とともに死んで了つた。それは實に露曆一八四二年十月二十九日であつた。鄕土讃美家はかくして夢に守られ淋しくこの世を去つた。ピエリンスキーは云ふ――「感情的の戀愛は彼が生涯のあけぼを照らした。かくてその見ごとな陰暗な紫蘭色の情慾の輝きの中に彼の生涯は暮れて了つた」――。

彼の短かい生涯の話をした私は彼の作品について私の評價を紹介する義務があるとを知る。彼の遺作を一通り通讀するに私たちは左程の時間と困難とを感じない。それは一つは彼の仕事が他の詩人達のそれのやうに分量が多くないからである。今一つは、彼の作品（詩、歌謠を含めて）が當時の寫實主義の最も新らしく且つ眞實な長所をのみ吸收してゐるからであらうと思ふ。彼は韻律的な抒情詩の官能と寫實的な美しいすら〳〵とした自然描寫の筆と、それから人々の魂を搖り動かさずにはゐないやうな強い心の力とを合せ備へてゐた。その人の魂を打ち震はするやうな強い精神の力の半面には、又、一平凡人としての、一般ロシヤ民衆の心の底を絶へず流れてゐる憂愁な暗潮がまるきりないではなかつたが、それは彼の明快な思想に氣壓されて稀に仄見ゆる位に止つてゐる。要するに失戀詩人は愁人型のロシヤ人ではないと云ふことに歸着せねばなるまい。無教育者の彼の用語は、無教育者だけに極めて自然的であり、原始的であり、激しい感情はいつも生眞面目過るほど生眞面目に流れてゐた。彼は民衆の感情（この場合ロシヤ人の大部分が農民であるから農民を指して私はロシヤ人とも云ひ民衆とも云ひ替へるが）と情緒と彼等の生活樣式と、（興奮せる抒情主義の立ち場に立ち、）主として南方地方の方語との結合を企てることに非凡の手腕を現はした。その詩に於て見るやうな語句の平

行などはまるで眼中に置かなかつた。そうした彼の初期の作品が、たとへプーシュキン其他の感化のもとに生れ出たものだとしても、彼は間もなくその型を破つて眞實にロシヤ人の魂からにじみ出る感情の私語を獨特有の形式に盛つたと云ふことは彼をして所謂「自然に出來上つた天才」の名を逞にさせた最も大きな理由でなければなるまいと思ふ。プーシュキンが當時の貴族の實生活を描寫したやうにカルツォフは彼をめぐる農民の實生活を如實に描いた。即ちロシヤ人の言葉を借りて云へば彼は正に「民衆の中から生れた」文人であつた。彼は彼の死後幾多輩出した農民文學者の先驅者として永久に私たちの記憶から消え失せることの出來ない人であつた。そこで再び私はロシヤ人の口調を借りて、彼を「ロシヤのバーンス」と云ひ「ロシヤ民衆文學者の祖父」と云はう。その意味に於て彼の作品は研究されなければならぬし又、そこに生命がつながれてゐる筈である。後の天賦の力量は、ことに、その深さと變化と種類に於て可なり心理的に取扱はれてゐるし且つそれは民衆の隱れたる藝術の發露とも云ふべき民謠の創作に現にされてゐる。後が持てゐた人格の力は、それを少しも在來的な、舊套的な手法と取り扱ひによらずして樂々と表現され感情に倶體化して民謠の中へ吹き入れた。その民謠はロシヤ人に取つて偉大なる救ひの聲であり、慰安の私語であり、激勵の叫びであり、向上の鞭であつた。と云ふことに就て私は、いさゝか次に述べてこの項を結びたいと思ふのである。この田舍青年のカルツォフが、彼が敬友ビエリンスキーに會ふことによつて、おそ撒き乍らもはじめて道德とか哲學とか、そうした問題と云ふものの存在を知つた瞬間からの一つの大きな人生に於ける目醒め！それはルツォフの無組織的な、非系統的な頭腦に極めて自然な澄明なしかしどことなく探求のよすがも知れぬ或る原始狀態の神秘主義的人生觀を與へたのであつた。而もそれすら、人生と自然に對する明確な考案を哲學と云ふ觀念から全然切り離れた立ち場で彼に與へたものであつた。その彼の作品にあらはれてゐる彼が唯一の愛の目的物である自然と人生なるものは、彼の作に示されてあるが如き「明るき微風のそよぎ」であり「收獲の野の輝きわたる野路」であり「よろこばしく土を堀る」人生であり自然であつた。希望、愛、それ等の歡ばしき心はプーシュキンにも、レルモントフにも發見することの出來ないものである。だがさうした樂天の思想は、決して樂天のための樂天ではなかつた。彼は一度ならず二度までも失戀の痛傷を負はされて悶へた。のみならず、自分を離れても彼の周圍には樂觀的な光とては微塵もないと云つていゝ生活の經營者である無數の農民が病魔と苦痛と飢餓に圍まれてゐた。彼はそれを知らずにゐたわけではなかつた。しかし、彼はその悲慘な事象から或力を得た。見よ！韃靼人の侵略以來引つづいて受けて來た暴虐とロシヤ貴族社會からの壓迫と悔蔑と、代々の官僚政治家に與へられた迫害と追課とを！それは人間同志の爭ひであつた。彼等の頭上にはその外に自然の脅威が加つてゐたのである。一年の大半を蔽ふてゐる有害な危險な天候と干潑と餓饉とそれに隨つて彼等を襲擊する疾病その他の災厄及び不幸とを大きな二つの肩に引受て來た農民達の忍耐力がそれ

であつた。樂天的性質、自己否定、犧牲の精神、運命論者風の思想、すべてそれ等（傳說俗謠や民謠に詠はれて來たところの）の驚くべき事實の凝視を、彼の作「傷ましき運命」や「村人の回顧」や「嵐の中に」や「十字架」や「路」の中に、それは迚も抵抗の出來ないものとして始めから運命づけられてゐる一つの偉大なる力としてその人生の不幸を解剖した結果迸り出る深刻なる吐息となつて現はれてゐるのである、には違ひないが、しかし、彼は肉體上の悲哀の、哀悼的又は絶望的吹聽者ではなかつた。これ等の苦痛懊惱には堪えなければならぬのだ、そして打ち勝たねばならぬのだと考へた。「悲しいだらうが――歡ばしい微笑を浮べ乍ら戰爭に行くのだ」「鶯の歌をうたつて闘ふのだ」と彼は叫んだ。カルツォフが持つてゐるところのロシヤ農民の剛氣は、如何なる場合にも失望せずに人生の路を眞つぐに、勇敢に突進することを唱つてゐる。「悲難に面しても、眞つ直ぐに立てよ！お前の靈魂のためにしつかり闘へ！」と云ふ心がおつた。それはカルツォフの心であつた。「幸に出會ふにはまだ決しておそくない――我々の生涯は日沒に耀くのだ――眞晝は太陽はあつい――しかし、夕方になるとおとなしく和らいで來る」と彼は謠つた。それは「友へ」と云ふ短詩の中にもさうしたものがあつたやうに記憶する。そこに私たちはロシヤ人の偉大なる「あきらめ」の心があることを認めるであらう。あるときは悲愁を、あるときは復讐と怨恨を、あるときはまた諧謔を、それによりて知ることの出來る傳說や傳說俗謠や民謠とカルツォフの作品とを比べるななば、そこにはロシヤ代々の民衆が「あきらめ」て來た「あきらめ」と「剛氣」との精神にぴつたりと符合する微妙な心線を發見せずにゐないであらう。その「民謠」「史謠」に表現された人間性の弱さと强さは直ちに私たちの胸へ潮のやうに迫つて來る。このカルツォフが活動しつつあるときに、ロシヤの文壇は寫實の上に立つたローマン主義が幾分下火になつて、「ロシヤ近代文學期」に入るべき自然主義、人道主義、神秘主義的時代の機運に向つてゐた。

收獲

（カルツォフ）

赤々と燃えて
曙は嚴そかにやつて來た、
もや〳〵と霧は散つた
大地の面に。
ゆらめく光の中に日は來た。
太陽の輝きと共に。
霧は高々舞ひ上つた
山嶺の頂きへ。

重々しき雲となる
黒々と。
その打ちふるへるは、
陰暗を追ひやるのだ。
彼女は沈思の中に
打ちふるひ、それは丁度
彼女が自分の遠い
母なる土地のことを想つてゐるやうだ。
その途中で暴風が
あら〳〵しく吹いて
高々と彼女を捕へて
旅へ旅へと送つて行く。
彼女はぴたりと
電光や
陰影や雷鳴や

生々した虹の衣を着た。
戰ひのやうに彼女は翔んで
到る處にひろがつた、
かくて彼女は打ちはたくこともあれば
また涙を流すこともある、それは
廣々として重々しい涙だ
をの重々しく夕立するところの
地のふところに
彼女はまたひろ〳〵と廣がり渡つた。
その時は潔い水に
大地に汎ねかつた、
大空からまたその時
愛する赤い太陽が顔を出した。
すると村人達は
目をはなすことが出來なかつた

彼等の庭園からと
彼等のエメラルドのやうに輝く田畑からと。

麥粒は重々しげにみのり
烏麥はすく〳〵と立つてゐる。
かと思へば夢見るやうに腰をかゞめる。
大地の面へ。
親切さうに微笑べ乍ら
丁度神から遣られた賓客のやうに見える
彼等の左右の
黄金の日へと。
黄金の波は
微風から起つてあたゝかに
ざわ〳〵と漣波を立てぎら〳〵と光を放つ
地上一面に。

村人達の
全家族はやつて來て、
彼等の娘に
鎌を入れるのだ。
堆塚は黄金色に
終夜たちつくし
軋る荷馬車の
歌は少しもやまないのだ。
麥株(つなよぼ)や滑車輪は
物置小屋の中に見ごとに置かれる
丁度王子のやうにほこりやかに
首をもたげて。
收獲は終つた、
愛する赤い太陽は最後に
秋の凉日へ向つて

今辿つて行く。
だが、あたゝたな
村人達の燈火につれて、
聖母にさゝげる
祈りの聲が起つて來る。

露西亞文學史 終

露西亞古典文學者索引（イロハ順）

(イ)

イズマイロフ……二四三
イヴン第四世……一三四

(ロ)

ロモノーソフ……一六一

(ハ)

バラチンスキー……三二七
バツウシユコフ……二六六

(ニ)

ニコン……四六八

(ホ)

ボルトニアンスキー……一六〇
ボクダノウイツチ……一七〇
ボロツキー……二八
ポソシユコーフ……一四〇
ポドリンスキー……三三三
ポレヴオイ……四五八
ポゴヂン……二九
ポロシン……三三
ポレジヤエフ……三三

ヘ

ペレゾウフスキ……一六〇
ヘラスコーフ……一七一
ペツシユチエフ……三三八
ペヨトル大帝……一四〇
ペトロフ……三三
ペスツウジエフ……三三八

ト

ドルゴルキー……二九
ドミトリエフ……一七六
ドブロリユボフ……三二三
ドミトリエフスキー……一五四
ドルン……四五八
トレヂヤコーフスキー……一四九

リ

リブニコフ……一八
リコフ……四五八
リトルフ……四五

オ

オストロジユスキー……四五八
オジオローフ……一七六
オブレシモーフ……一七一

カ

カラムジン……一七五
カテリナ皇后……一六六
カンテミール……一四三
カプニスト……一七二
カルツオフ……一四二
カズローフ……一三三
カメネフ……一二

タ

タチシチエーフ……一四六
ダシコフ……一〇五
ダニロフ……一〇四
ダニエル……一三〇

レ

レルモントフ……一四九

ツ

ツルゲーネフ……一四一

ネ

ネクラソーフ……一四二
ネストル……一一

ナ

ナデイジデイン……一四八

ラ

ラズニエチニコフ……一四八
ラヂシチエフ……一二
ラヴタスキー……一一一

ウ

ウヌネウイチノーフ……三三
ウラジミル第一世……二二
ウラジミル第二世……二四
ウザイアゼムスキー……三三
ウオルコフ……一三

ノ

ノヴイコフ……一十四

ク

グルコイ……四八
クルコヴスキー……一七七
クリジヤニツチ……一三九
グリボイエドフ……三三
クルイロフ……二二
クニヤジニン……一六八
クルブスキー……一三三
グリボウスキー……三〇

ヤ

ヤヴイコフ……三三
ヤギンスキー……一三八

マ

僧マキシム……二二
マイコフ……四

ケ

ケムニステル……一七二

フ

フイラレ……一三九
プロコボウイツチ……四一
フオン・ヴイジン……一六七
プーシユキン……三三

ニ

コトシキン……二八
コルサコーフ……四四
コストロフ……一四四

テ

デルヴイグ……三七
デルジヤヴイン……一六

ア

アクサコーフ……四三
アブレモシフ……一六
アダドロフ……一六四

サ

ザゴウシユキン……四六

メ

メンチウス……二六
メルズニコーフ……四二
メレツキー……四二

シ

シリル……一六
シジアタ……二一
ジユコフスキー……一九

ヒ

ヒルフエルヂン……四
ビエリンスキー……四〇
ヒラリオン……二一
ビサリエーフ……四三

モ

モギーラ……四六

セ

セラピオン……一三一
セヴシン……一七五

ス

スタンキエウイツチ……四二八
スモトリツキー……四五八
スチエルバトフ……三三
スマローコフ……一六六

（追　補）

メレチ・スモトリツキー（キエフ中心の教育文化發達初朝の文典作者）
ジザニ・ツスタノヴズキ…（同上・スラヴ語最初の文典編者）
ピョトル・モギーラ（同上・キフエ專門建設者―一三七參照）
ボグダン・リコフ（ラテン語より宇宙誌を飜譯せる人）
イワン・ドルン（同上キエフ文化中心時代に於ける）
オストロジュスキー（一五八〇年にオストロフに學校を建設せし人）
僧ニコン（一六〇五―一六八一文化改造期に於ける闘士の一人）
僧アルセニク・グルコイ（「奇蹟の寺」附屬專門學校管理者一六三二）
ミハイル・ニコラエヴイツチ・ザゴウシユキン（「ユリ・ミロスラヴスキ」の作者一六二九）
ボゴウヂン（一八〇〇――一八七五―歴史小說流行時代の歴史小說家）
ポレヴオイ（一七九六――一八四六――同上）
ニコライ・イヴノヴイツチ・ナヂジユデイン（同上文學者）
イヴノヴイツチ・ラズニエチニコフ（同上――「氷の家」の作者）

"Приходская Библіотека" 〔モスクワ市チチエリン書店發行叢書〕

"Библіотека Маленькая Русскихъ Классиковъ" 〔上海マルテンセン書店發行叢書の一部〕其他に (A. Newmarch), "Progress of Poem in Russia" (P. Kropotkin), "Reality and Ideal in Russian Literature" (Isabel Hapgood), "Russian Lyric songs" "Heroic songs of Russia" (Lefred Bruneau), "Musique de Russie" 其以外にモスクワ大學發行の歴史雜錄の中の Гариковъ や Маиковъ や Либниковъ などの民謡研究論説と Мерешковскій の評論集の一部をほんの參考にしたが、雜誌では少かに歴史的方面の "Былое" や "Русская Мысль" 及び年代誌の "Дальневосточный Настольный Календарь (На 1921 Г.)" を見ただけである。て、其他は、これまで著者が研究して居たものゝ草稿に由つたので、それが此研究の大部分をなして居る。

(以上)

著者の參考書

"Сочиненія Л. И. Писарева" (Полное собраніе Въ шести томахъ) 〔ペテルブルグ市バヴレンコフ書店發行のもの〕

"Русская Хрестіоматя" (Составилъ левъ Поливаиовъ) 及び同じ著者の "Русская Народныя былины" 〔モスクワ市ワシリエーフ商會發行のもの〕

"Сочиненія В. Г. Бѣлинскаго" (Полное совр.) 〔ペテルブルグ市バウレンコフ書店〕

"Полиныи Русскіи Пѣсенникъ" 〔エム、エヌ、マイゼリヤ書店發行のもの〕

"Басни Крылора и Измаилова" (А. Ульяновъ—А. Н. Комаровъ)

"Исторія Новѣишеи Русскои Литературы" (А. М. Скабичевскіи) 〔ペテルブルグ市バヴレンコフ書店發行のもの〕及び同じ著者の "Очеркъ Исторіи Русскои Цензуры" 又同書店の發行にかゝる Г. Брандесъ, "Сочиненія" "Библіотека Русскихъ Классиковъ" 〔上海マルテンセン發行叢書〕

"Библіотека 'Наша Рѣчь'" 〔チエホスロヴアク國プラーハ其社發行叢書全部〕

"Библіотека 'Русское Цвло,'" 〔同上ルスコエヂエロ社發行叢書〕

"Біографическая Библіотека" 〔ニユヨルク市第一ロシヤ出版會社發行叢書〕

"Русская Народная Библіотека 〔モスクワ市ニエクラーソフ書店發行叢書〕

大正十一年二月二十日印刷
大正十一年二月廿八日發行

露西亞文學史
定價金四圓九拾錢

著作者　大泉黑石

著作權所有

發行者　東京市京橋區桶町十五番地　株式會社大鐙閣　代表者　面家莊佶

印刷者　東京市神田區美土代町二丁目一番地　山岸富士雄

印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍

發行所　東京京橋桶町　大阪三休橋南　株式會社大鐙閣

振替東京三三六一八番大阪二七一五五番

329
309

終